樅の木の子孫たち　第三部

明治の世

小城ゆり子

(1)石油ランプ

維新の戦いで、長岡の町は、焼け野原になった。その上、ただの焼け野原ではなく、戦死した人たちの屍がるいるいと転がっている。

戦で死んだ藩士たち、そして藩士でもないのに流れ弾等に当たって亡くなった庶民たち。つらいことだが、屍は悪臭を放つ。生き残った人々は、この中で、まず、屍を荼毘にふす。そのとき、できれば死者の身元を見つけて、家族に知らせる。しかし、官軍の兵士たち、その他、身元のわからない遺体も多い。仕方がない。

遺体を焼く煙は、何日間も続いた。そうして、人々は、それぞれの家族を失った悲しみに耐え、生きていかなければならない。町の復興も急がれていた。

一八六八年十月二十三日（旧暦慶応四年九月八日）、世は慶応より明治と改められた。革命と内乱の最中である。翌年五月には函館五稜郭にたてこもった榎本軍も降伏し、ここに戊辰戦争も終結し、日本は名実ともに明治の世にかわった。

そして一八七一年（明治四年）には、第二革命とも言える『廃藩置県』という無血クーデターみたいなものが行われ、日本全国から藩が消えた。大名たちは東京に集められ、後に華族となったが、各藩の武士たちは失業し、巷に放り出された。

貝喰新田の高橋家は、百姓であるから、これには関係がない。失業もしない。が、村々には、百姓たちの不平不満が渦巻いていた。百姓たちは、新しい世が、自分たちの世が来る、と思っていたのに、年貢半減令も撤回され、地租改正で更なる収奪にさらされることになったのだ。

明治維新は、武士たちの戦いであったが、彼らの利益にもならなかった。また維新を実際に戦った指導者たちも、その一部の人々は国を治めることになったのだが、西郷隆盛や江藤新平たちのように新政府に反乱する人々もいた。

長岡は初め、新潟県でなく、柏崎県に編入されたので、長岡藩の飛び地である幕府領の貝喰新田も、柏崎県内となった。

激動の時代であったが、ゆきのは洋助の死を悲しんで、気うつの病にとりつかれ、家に閉じこもっていた。

義三郎は、一途にゆきのの心が解けるのを待っていた。彼はゆきののひたむきさを愛していたし、それに彼は分家の三男なのだ。本家の婿養子になりたかったのだ。

ゆきのの両親、庄太郎とよねが、二人を結婚させた。母親のよねがゆきのに言う「俺たちは、十年も、義三郎さを待たせたんだ。お前も、洋助も亡くなったことだし、ここらで心をいれかえて、義三郎さと結婚しなせえ」。

ゆきのは、何年もかかって縫い上げた白無垢の花嫁衣装を棄てた。洋助がいればこその白無垢だった。洋助がいればこその結婚だった。この衣装とともに自分の洋助への思いもなくなってしまえば、どんなに楽なことか。だが、いつまでも続き、自分を苦しめ続けるこの思い……。気うつの病のまま、彼女は義三郎の妻になった。

結婚してしまえば、夫婦の生活は、それはそれなりに流れていく。心に病をかかえていても、日常は、朝が来て、昼が来て、夜が来る。毎日がそれなりに忙しい。そして、愛し愛される歓びがなくても、

子はできる。
　子ができる……ゆきのは、うつ病がひどくなるだけで、胎内の我が子をあまりかわいく思っていなかった。が、母性本能がなかったわけではない。死産して、つらくて、毎日泣いてばかりいた。
　あたしがいけなかったんだ、あたしがいつも悲しみにくれて、この子のことを考えてやらなかったから、この子は亡くなったんだ……と彼女は自分を責め続けた。
　八衛門も、老いて、病床にあった。病の床で、彼は、「ゆきのう、ゆきのう」とうわごとのようにゆきのを呼び続けた。
　母親のよねに言われて、ゆきのは祖父を見舞った。
「ゆきのう……わしは、お前の幸せな姿さえ見たら、もういつでもあの世へ逝っていいんだ。お前のことだけが心配で……心配で、心配で、たまらねえんだ。お前、死産した子のことはどう思っているんだね？」
「あたしは……自分のことばかり考えて、泣いてばかりいたもんで、お腹の子のことも大切にしてやらんで……かわいそうなことをしてしまって。この子がもし、洋助さの子だったら、どんなに幸せだったか、この子をどんなに大切に守ったか、それを考えると、もう、この子にもうしわけのうて……この子が不憫で……」
「そうか……お前は、義三郎のことは嫌いか？」
「えっ？……いえ、別に……」
「女としてではなくても、家族として、義三郎のことも大切にしてはくれねえか？」
「……」
「人の世は、何事も天の神様が決めるのだ。お前が義三郎と夫婦になったのも、天の神様がそう決めなさったんじゃ。人は誰も、神様のお決めになった運命に逆らってはならん。な、ゆきの、わしはもうじき天に逝くが、その前にひ孫の顔を見せてくれたら、どんなに喜ばしいか」
「じいちゃま……」
「義三郎の妻として、この家の女主人として、これから先の人生を生きていくんだ。何事も悪いようにばかりは考えず、明るく生きていくんだ。またもし後で子ができたら、その子は大切にするんじゃぞ」
「……」
「この世の中、これから先はどうなるか、わからんけれどな……」
　目をしょぼしょぼさせて、のどの奥から無理にでも搾り取るような声で、八衛門はゆきのに説いて聞かせた。
　庄太郎たちは、老父の枕辺に行方不明の次男、虎次郎を呼びたかったが、彼の所在は全くわからなかった。知っているはずの洋助も死んでいる。結局、八衛門は、一人寂しく亡くなった。
　八衛門のひ孫は三人できた。ゆきのはこの祖父にひ孫たちの顔を見せてやることはできなかったが。長男俊男、長女柚香、次男竜之介。いずれも、愛の歓びなくしてこの世に生まれ出てきた子供たちである。
　といっても、義三郎に何か問題があったわけではない。本家の婿養子になりたくて、長い間ゆきのを待っていた彼だったが、それを非難することは誰にもできないだろう。誰の心の中にもそういう打算はある。それが多いか、少ないかの差である。彼は夫として、よくゆきのに接していた。
　それはゆきのにもわかる。彼女も、妻としては義三郎を受け入れていた。ただ、それは、洋助への思いとは、別のものであった。
　ゆきのは、子供たちの良い母親になろうと思った。気うつの病も治ってくる。結ばれなかった恋の思いも、時間とともに遠くなる。彼女は、子供第一で、乳母も雇わず、自らの手で子供たちを育てた。

　そんな毎日にも、文明開化の波は、この片田舎にも、押し寄せて来た。
　村には、食料品や雑貨を扱うただ一軒の商店がある。江戸時代から続く商店で、屋号は貝喰屋という。その貝喰屋が、ある日、新しい輸入品を高橋家に持参してきた。俊男が九歳、妹の柚香がまだ六歳のときである。竜之介は、まだゆきのの胎内にいる。
　ガラスでできた、吊りランプ。貝喰屋の主人が何か油みたいなのを注いで、天井から吊し、火を付けると、ぱっと明るい光が輝いた。
「まあ！」
　ゆきのたちは思わず感嘆の声をあげた。
「まあ、なんて明るい！」
「そうでごぜえましょう、行灯などよりはるかに明るいのでごぜえます。その上、このランプに使う石油は、行灯に使う菜種油などよりもはるかに安いのでごぜえます」
　と、貝喰屋の主人は、手に持った石油を、皆に見せて、そう言う。
　ゆきのは「あっ！」と思った。
「石油？　それ、草生水のことかね？」
　彼女は、以前、亡くなった祖父・八衛門より、この家と草生水のことを教えられていた。あの幻の『燃える水』が、再びここへやってきたのか？
「草生水……そうでごぜえます。ここ越後に昔から語り伝えられた『燃える水』で。ただ、今、ここにお持ちしたのは、外国より輸入されたものでごぜえます。生の石油は臭うて臭うてかないませんので、『灯油』に精製したものでごぜえます。輸入品ですが、菜種油よりもずっと安価なのでごぜえます。明るくて、これさえあれば、夜でも仕事や勉強ができますんで。どうでしょう、これ一つ、お求めになっては？」
「わかった。一つ、試しに買おう」
　と、主人の庄太郎が言う。
「毎度ありがとうごぜえます」
　貝喰屋は、商談成立で大喜び。
　この頃、石油ランプ（灯油ランプともいう）は、日本国中で爆発的に売れていた。
「おっか様、くそうずって何？」
　俊男が聞く。ゆきのは、以前祖父に聞いた『燃える水』の話をした。
「かよ様のために、徹次郎様は、雪の中、あちこち探しまわって、その春、くそうずを持って来られたんよ。で、めでたくお二人は結婚して。お二人の結びの神が、このくそうず。漢字で草生きる水と書いて草生水、越後に昔からあったんよ、『燃える水』が。くそうずというのは、臭いからでしょうね。これみたいに、精製すれば、臭みもいくらかなくなるんでしょうね」
「それ、越後には今もあるかな？」
「それはあるでしょうね。探せば」
「俺、それを探す」
「えっ？」
「それを探すんだ。草生水を手に入れて、皆に売るんだ」
「まあ」
　幼い俊男の決心。この時のこの決意が、以後、彼のライフワークになっていく。

(2)国漢学校

　ここで国漢学校のことに少しふれておこう。
　官軍に逆らった長岡藩は、逆賊となった。戦争による火災で家も財産も失った藩士たちに、国は、つまり薩長政府は、冷たい処遇をする。長岡藩七万四千石を一挙に二万四千石に減らしたのだ。藩からもらえる扶持の他には何の収入もない藩士たちは、たちまち窮乏した。
　米もなく、粥もすすれない……皆、餓死寸前の状態だった。頼りにする家老・河井継之助も、北越戦争で戦死している。
　かわって文武総督、大参事に任命されたのが、小林虎三郎だった。
　教育は国家百年の計。この焦土でまず必要なのは、二十年後、三十年後に国を支える若者たちを教育することだ、と彼は考えた。もちろん、「国」とか「国家」とかいう概念は、江戸時代にはなかった。黒船襲来以来、諸外国から交易を求められて、人々の中に「藩」ではなく、「国」とか「国家」とかいう考えが生まれ始めていたのである。
　で、彼は、焼け残った寺の本堂を借りて、国漢学校を開設した。以前の藩校が漢学だけを教授していたのに対し、漢学の他、国学も教授するので、国漢学校と名づけた。入学資格は特になく、士族でなくても百姓・町人の子供たちでも、入学することができた。
　しかし、荒れ果てた町、飢えた人々……この窮状を見るに見かねた近くの三根山藩（長岡藩牧野家の親戚）から、藩士たちへの見舞い品として、米百俵が贈られてきた。
「これで、食える！」
「当分はこれでしのげる！」
　と喜び勇んだ藩士たちに対し、虎三郎は、この米を売って代金を国漢学校のために使おう、と説得した。米は食べてしまえば、後に何も残らない、しかし子供たちの教育に使えば、将来、国のためにどんなに役に立つか、はかりしれないのだ、と説得した。これが有名な『米百俵』の物語である。
　これらの米を買ってほしい、と虎三郎が米百俵を荷車に積んで、米問屋の鈴正へやってきた。
　戦で店を焼失した鈴正は、仮小屋で細々と米屋をやっていた。細々と、というのは、この時分、米の買い手は多いのだが、仕入れることのできる米が少なくて、米屋も困っていたのである。
「これを売ってしまうのでごぜえますか？　それでよろしいんで？」
　と、鈴正の主人は、何度も念を押した。
「それは、私どもは、今、売る米が少のうて、困っておりますが。ほんに私どもにとっては、喉から手が出るほど、ありがたくてほしい米ではごぜえますが、しかし、これは皆様へのお見舞い品では？」
「いや、それが、仔細あって、売ることにしたのじゃ。この代金は、国漢学校の新しい校舎を造り、備品をそろえるのに使うのじゃ。これからの世の中、何といっても大切なのは、子供たちの教育じゃ。教育は国家百年の計。これからの世の中を担っていく子供たちの教育こそじゃ」
「さようでごぜえますか……」
　と、鈴正の主人・米持（よねもち）日之介は、しばらく考えていた。米持というのは、町人も苗字を持つことになったので、彼は、米屋の自分には米持という苗字が良いと、お上に届け出たのだ。
　その米持日之介。

「では、米払底の現在、お米の値段はこういたしましょう」
　虎三郎にそろばんを見せる。
「あっ、こんなに高く？」
　相場よりずっと高い値なのだ。
「さようでごぜえます。手前どもも、国漢学校に寄付させてくだせえ」
「それはかたじけない」
　虎三郎はすっかり喜んだ。
　鈴正の買った米であるが、日之介はよその土地の米屋にそれを売ったりせず、安い値段で土地の人々に売った。こうして鈴正の儲けは何もなく、かえって持ち出しになったが、日之介は金では買えぬ良い評判を、信用を、持つことができた。
　その国漢学校、戦で焼け残った村のぼろぼろ校舎から、新しい土地に、立派に新築された。備品もそろい、幼い子供たちの学舎を主として、その他に同じ敷地に洋学局と医学局とが併設された。
　後に、子供たちの学校は阪之上小学校になり、洋学局は洋学校に、医学局は長岡病院となった。
　また後に、洋学校は長岡中学校となり、現在は長岡高等学校となっている。長岡病院は長岡赤十字病院となる。こうして長岡の教育と医学の中心はできあがっていく。

　さて、貝喰新田の高橋家に話を戻そう。
　ゆきのも、子供たちの教育にやぶさかではなかった。というより、教育熱心な、いわば明治の教育ママである。教育の大切さは、祖父・八衛門から聞かされていた。その祖父のやっていた寺子屋は、今は村の寺の和尚に引き継がれている。そこで長男の俊男が、初等教育を受けていた。
　義三郎は、小作料として受け取った米を、鈴正に売りに行き、この阪之上小学校と洋学局のことを聞きつけた。新しい学問を教えている……それに、士族でなくとも、百姓や町人であっても、子供たちを入学させることができるというのも、胸にひびいた。
「わしにも、子がおるんじゃ。男二人と女一人。この子供たちに、教育を受けさせたいんじゃ。入れてもらえるじゃろうか？」
「それはもちろん。直接行って頼みなせえ。息子さん二人はもちろん、一人のお嬢ちゃんも入学させたいんじゃな？」
「それはなあ、国を作るのは男の子たちじゃが、その男の子たちを育てるのは、母親の仕事。娘を良い母親にするには、やはり、ここは女の子にも教育を授けんと」
「それもそうじゃの。うちにも、幼い女の子が一人おるが、その子をどうしようか、小学校に入れようか入れまいか、実は迷っておったんじゃて。千鳥と名付けた娘なんじゃが」
「ほう？　で、そのお嬢ちゃんは今いくつで？」
「当年とって七歳になる」
「ほほう、うちの娘も七歳じゃ。息子は十歳と、下の息子はまだ赤ん坊じゃが」
「では、その長男殿を洋学局へ、長女殿を阪之上小学校へ入学させたらどうじゃ？　お宅からは毎日学校に通うことは大変だから、お二人をわしが預かろう。で、将来、お宅の長男殿とうちの娘をめあわせたいのう」
「それは、もう、喜んで」
　正式な婚約ではなかったが、こういう風に高橋俊男と米持千鳥との行く末が語られていた。これは事実となって、幼なじみになったこの二人は、後、結婚する。
　これは、もう少し後の話。

米の代金を受け取って屋敷に帰って来た義三郎を、ゆきのは父母と一緒に出迎えた。心も弾んで、子供たちの学校の話をする義三郎。それを喜んで聞くゆきの。教育熱心な彼女も、子供たちを長岡の学校に入れようと思う。

柚香は、利発な子だった。彼女は、小学校へは行きたい、が、そのためには長岡の町へ行き、鈴正に下宿しなければならない。母親と別れ別れにならなければならない……。

「母さんは、まだ赤ちゃんの竜之介がいるから、お前たちについて行ってはやれん。じゃが、その代わり、女中のたみをつれて行かせるから、なんでも困ったことがあったら、たみにお言い」

ゆきのはそう柚香に言い聞かせる。

しかし、内心、ゆきのもつらいのだった。これまで、彼女は、つらい別れを体験してきた。幼い心でせいいっぱい恋し慕った洋助との血のにじむような別れ。自分をはぐくんでくれた祖父・八衛門との死に別れ。今度も、死別ではないけれど、まだ幼い俊男、柚香という二人の子を手放さなければならない……。生きるということは、次々と愛する人たちと別れて行くことなのだ。出会いがあって、別れがある。そして、いつかは、再会もある。それが人生というものなのだ。

（３）町からの手紙

貝喰新田の村に、郵便取扱所ができた。なんでも、手紙にここで売っている切手を貼って出すと、全国どこへでも届けてくれるそうだ。

近くへ出すのも、遠くに出すのも、料金は同じ。しかも安価だ。また、いちいち郵便取扱所（郵便局）へ行かなくても、村に何ヵ所か取り付けられている書状集め箱（ポスト）へポンと手紙を入れるだけでよい。また、よそから来る郵便は、配達員がそれぞれの家へ配達してくれる。

この制度が明治の世に始まって、江戸時代の飛脚便がどんなに不便だったか、ゆきのにもよくわかった。京へ行った洋助と虎次郎とからは、十年間なんの便りもなかった。しかし、それもそうだろう。飛脚便は長岡の町までしか来なかったし、また京の都は遠方で、料金も高かったに違いない……また、それよりなにより、洋助にも、虎次郎にも、尊皇攘夷、倒幕開国、という大仕事があり、多忙を極めていたに違いないのだ……男には女のことなどにかまっていられない大事な仕事がある……と、ゆきのは、洋助の音信不通を悲しんだこともあったけれど、今となっては、よくわかるのだ。

あのとき、この郵便の制度があったら……。いや、そんなことは言うまい。自分が洋助を追って、京に行っていたら、とも思うが、それはゆきのにはできなかった。彼女は、ただ待つことしかできない女だった。

明治の世になって、彼女の身にも、いくつかのことがあった。父・庄太郎と母・よねの死。祖父に続いて父母との別れ。この世は、別ればかりである。

彼女は、高橋家の女主人として働き、手元に残った次男・竜之介を育てて、毎日が多忙であった。

夫婦の間のことは……はずかしくて言えないけれど、彼女は、夫と性交渉しなくてよかったら、どんなに自分は幸せなことか、と内心思っていた。

まじめで浮気一つしない義三郎は、そんな妻の気持ちに気づいていないようだった。夫婦とはこんなものか、と考えているようだ。ゆきのは、表面上は、貞淑で従順な妻であった。こう考えると、ここで一番不幸なのは、義三郎かもしれなかった。

さて、話は元に戻って、この時代に始まった郵便のことである。

郵便取扱所ができて、さっそく鈴正の主人・米持日之介が、高橋義三郎とゆきのに宛てて、手紙をよこした。

その中で、日之介は、今度俊男が洋学校を、柚香が小学校を卒業すると書き、今度は末っ子の竜之介を小学校に入れたらどうか、自分も前の二人と同じく幼い竜之介の面倒もみさせてもらうから、と書いている。

しかし、この手紙の目的は、そんなことにあるのではない。手紙の眼目は、女の子の柚香を、もっと上級の学校へ入れてはどうか、ということにある。上級学校……しかも、それが、なんと華族女学校だというのである。

それは、先年華族令に従って東京に行った元長岡藩主・牧野子爵からの話であるという。今度華族の令嬢たちを教育する華族女学校ができ、華族の娘でなくてもそこへ入学できるようになった。それについて、高橋柚香を、そこへ入学させてくれないか、という話であった。柚香は、坂之

上小学校でいつも群を抜いて一番の成績をとっていた。
「まあ、柚香は、そんなに優秀な子なんでしょうか？」
　ゆきのは、半信半疑だった。
「そうかもしれねえな。なにしろこの高橋家では、代々、女の方が優秀なんだから」
　などと義三郎は言う。
「そんな、お前様、そんなにきめなくたっていいがね」
　と、ゆきの。「きめる」というのは、この地方独特の方言で、「すねる」というような意味である。少しニュアンスが違うが。
「そうだな。これからの子供たちは、教育次第。教育さえ受ければ、百姓の子も大臣にも博士にもなれる。やっと良い世の中が来たんだ」
　と義三郎が言うように、この時代、現代とは違うのだが、第一次教育ブームとでもいうようなものが、社会に渦巻いていた。
　それは、禄を離れ、いまはただの失業者になった士族たちが、なんとか小役人や巡査や教員になって食いつなごう、そのためには蛍の光、窓の雪、とにかくなにがなんでも勉強しよう、とがんばっていたのだ。
　もちろん、百姓の子供たち、町人の子供たちも、一緒にがんばった。勉強さえすれば、上の学校に行ってしっかり勉強すれば、官員にも教員にもなれる。貧しい子供たちは、そう考えて、きそって上級学校をめざしていた。
　元の身分は、あまり重要視されないようになった。出身階級が何であれ、個人の努力次第で出世できるのだ。この新しい現実は、ゆきのにとって、苦しいものだった。洋助も、もう十年若かったら、いや、あのままでもいいから死にさえしなかったら、私と結ばれたのだ、と思う。ゆきのはいつまでもそのことばかり考えていた。

　その冬は、ひどい大雪だったが、雪も解け、また新しい春がやってきていた。そのある日、ゆきのは竜之介を連れ、長岡の町に行った。
　戦火にさらされた町は、すでに復興し、明治の世の新しい町ができていた。以前の武家屋敷などはまったくなくなって、庶民の家が次々と軒を並べていた。そう、武士たちも、今は民衆の側に落とされていたのだ。
　鈴正は、米の問屋と小売店とを兼ねていた。商店街も戦火で焼かれ、ようやく元の活気を取り戻し始めていたのだ。
「ごめんくだせえ。貝喰の高橋でごぜえます」
　ゆきのは、ていねいに挨拶する。
「まあ、これは、これは、高橋の奥様」
　鈴正の女主人・ゆうが迎えてくれる。
「こちらが末の息子さん？」
「はい。これでも、次男なので、もしかあんにゃでごぜえます」
　もしかあんにゃと言われて、一人むくれている竜之介。それがおかしくて、

「ほっ、ほっ、ほっ」
　ゆうが笑う。
「この子もこれから小学校に入れてもらって、びしびしきたえてもらおうと思うてます」
「そうですか。で、上のお子さんたちは？」
「それなんですが……柚香は、せっかく牧野様がお口添えくださったのをお断りするのもなんですので、まことに恐れ多いことでごぜえますが、お言葉に甘えて華族女学校に入学させていただきたいと思うてます。それで、俊男は……俊男のことは、どうしたものか、私どもも考えあぐねておりまして……うちの長男なので、上の学校に行くのもよし、このまま家を継ぐのもよし、何事も本人の気持ち次第と思っております」
「そのこと、ゆきのさ」
　ゆうは、いたずらっ子みたいに、ゆきのの小耳にそっとささやく。少女のように。
「俊男ちゃんは、日本のせきゆおうになるんだそうでごぜえますよ」
「せきゆおう？　なんですか、それ？」
「さあ、なんですか、それは私どもにもよくわからねえんでごぜえますが」
　噂をすれば影とやら、そこへ当の俊男がやってきた。
「石油王。俺、地面を掘って、石油を出して、それで金持ち・石油王になるんだ。石油ってのは、ほれ、このランプの燃料のことだ。今は輸入品でも、これは越後にいっぺい埋蔵されているんだ。だって草生水って、石油のことだろ。昔、我が家の先祖・徹次郎様が、かよ様のために見つけてきた燃える水。越後には、自然にわき出るほどいっぺいあるんだな。俺はそれを掘り当て、日本でいちやく脚光をあびて、実業家になるんだ」
「へええ……でも、それは大部分、地面の下にあるんだろ？　それを、どうやって掘るの？　ほんの少し掘れば、出てくるものなのかい？」
「いや、ずっとずっと地中深く掘らなければ出てこないらしい」
「そうだろ？　そんなに深く、どうやって掘るの？　それに、越後といっても、広いじゃないの。広い土地の、いったいどこを掘れば出てくるの？」
「それは、研究するんだ」
「研究？」
　ゆきのには、わからない。三人の子供たちのうち、長男のこの子がいちばん危なっかしい、と、この時は、そう思えた。

（４）東京

江戸は東の京、つまり東京と改められ、日本の首都になった。
米問屋の俵屋も、海産物問屋の雁屋も、江戸の頃の何度もの大火にあって、今はようやく復興し、日本橋で店を開いている。
長岡の鈴正は、毎年、荷駄隊を組織して新潟米を運んで来るので、いつも俵屋と親しかった。
そして、隣の雁屋とも、自然、親しくなる。雁屋と貝喰新田の高橋家との関係は、話に聞いていた。雁屋の娘・おくみが、仙台藩家老の原田甲斐の側女となり、女の子を一人、もうけた。その後、甲斐は罪を得て処罰され、おくみと娘・かよとは、新潟に逃れて行った……まあ、二百年も前の話である。
ゆきのは、新潟の雪が解け、ようやく春がそこまで来たかと思われる頃、一人娘の柚香を連れて、東京に向かった。柚香を華族女学校に入学させてもらうためである。
彼女たちは、東京への旅路、昔のかよたちのように水上温泉に泊まった。長岡から水上までは歩いて来たのだ。
温泉に浸かれば、旅の疲れも癒される。あと少しで、高崎に着く。高崎から東京までは、ちょうど汽車が開通したところだ、と聞いている。
「もう少しよ。あと少しの辛抱よ」
「あたしは大丈夫。おっか様こそ、長旅でお疲れでしょ？　大丈夫？」
親娘は、互いに相手を気遣う。
「こんな長旅は、あたしも初めて。かよ様たちも、ここで泊まったんね。ここで旅の垢を落として。温泉は良いねえ。疲れもとれるし」
「そうね。ほんとに良い気持ち」
すっかり旅の疲れを癒した二人、水上から高崎までは、馬車を雇って行く。高崎からは、汽車である。
蒸気機関車に初めて乗った。煙がまぶしい。外の景色を見ようと窓から身を乗り出すと、煙の中の石炭の欠片みたいなのが目に入って、痛い。あわてて、窓を閉める。
汽車は速い。窓外の景色がどんどん変わっていく。わくわくした楽しい汽車の旅。母娘水入らず。
そうして二人は東京に着く。

柚香にとっても、ゆきのにとっても、初めて見る東京である。まばゆいばかりの文明開化の都である。大勢の人々が行き交う。皆、忙しそうである。怖い。
日本橋という名の町を探し、鈴正で聞いた雁屋を探す。旅は楽しかったが、怖かった。東京は、どこがどこやら、何が何やら、わからない。彼女たちは、都市といえば、長岡の町しか知らなかったのだ。
ここへ来る道すがらも、ゆきのは、いつ何時、無法者に襲われるか、大切な路銀をとられてしまわないか、女と子供の旅なので、怖かった。やはり義三郎に付いて来てもらえば良かったのではないか、と思う。東京に着けば、東京に着きさえすれば、と思って来たが、着いてみれば、東京は不安な都市だった。
始めて見る煉瓦造りの建物。馬車や、人力車など見たこともないものが、たくさん走っている。
迷子になって、道を尋ねあぐねていると、空の人力車を引いている車夫がそばにやって来た。
「奥様方、どちらへお出かけでございますか？」

「えっ……あの日本橋というところの、雁屋とか……あの、何でも海産物問屋の雁屋とかいう……あの、ご存じでしょうか？」
「はい、もちろん、雁屋様なら、よく存じております。これからご案内します。奥様、ここへお乗りください。お嬢様の方も、ほら、そこの」
　近くにいる仲間の車夫を指す。
「さあ、乗った！　乗った！」
　悪者たちにさらわれそうで、ゆきのは不安だったが、自分たちだけで歩いていても、どの方に歩いていいのかもわからないので、しかたなく、勇気を出して人力車に乗った。
　もちろん、ゆきのは前もって雁屋の主人に仔細をしたため、手紙を出してあった。しかし、かよたちのことはもう二百年も前のことである、雁屋の人々が自分たちを喜んで迎えてくれるかどうか、それも不安だった。親戚といっても、あまりに遠い縁戚なのだ。
　不安はいらなかった。
「はあい！ご到着！」
　人力車が雁屋に着き、車夫が告げる。
　待ちかねていた雁屋の人々が、
「わあっ！」
　と、店から出て来た。
　主人夫婦に若い息子が一人、小さい娘たち二人。
「これは、これは、ようお出でなさって。旅も遠くて、大変でしたろう」
「遠い越後からお出でなさって、さぞお疲れでしょう。さ、まず、お風呂に入って、旅の垢をお落としなさいまし」
　と、この家の主婦が、二人を湯殿に案内する。明治の初め、なかなか民家に風呂場はなく、銭湯がにぎわっていたが、この大店の雁屋には、風呂があった。訪問者をまず風呂に案内するのは、最高のもてなしとされていた。
　ゆきのと柚香、二人は雁屋の好意に甘えて、入浴し、安堵して一息ついた。
「お湯って良いわねえ」
ゆきのがしみじみ言う。
「そうね、温泉だともっと良いわね。ぜいたくだけれど」
　柚香は、ここへ来る途中の水上温泉を思い出して言う。
「あたし、温泉宿の娘に生まれていれば、良かった」
「ほんに、あたしもそうじゃ」
　母娘二人、楽しく笑い転げる。旅の疲れも吹き飛んだ。
　そして、後に、新しい温泉がこの一家に劇的変化をもたらすのだが、二人はまだそれを知らない。

　二人はまず、牧野子爵邸に挨拶に行った。あいにく、子爵はるすだったが、お礼の口上を述べて帰って来た。
「ああ、良かった。実は、あたしも、華族様のお邸なんて初めてで、怖かったんよ」
　ゆきのは、ほっと胸をなでおろす。ここは母親のゆきのが、参上の挨拶をするところで、田舎女の彼女は、怖かったのだ。
　太っ腹の娘・柚香は、笑った。子爵様とて、鬼でも蛇でもあるまいし……。

翌日、二人は四谷の華族女学校に行った。そこは、ゆきのも柚香もびっくりするほど広くて、緑の木々や花々に囲まれた瀟洒な洋館だった。華族の姫君たちによく似合う。
事務室で口上を告げると、学監室に通された。
立派なソファア。これまで見たこともない、すてきな西洋風応接間。
学監は、女性だった。下田歌子という宮廷歌人である。
何事も初めての経験で、ゆきのはもういい年なのに、おずおずしている。娘の方が堂々としている。
やっと母親が挨拶する。
「初めまして。娘をこちらに入学させていただきたくて、参りました。私どもは華族様ではございませんが、特別に元長岡藩主でいらした牧野子爵様のおはからいで、こちらに入学できるとか、うかがっておりまして」
学監は、微笑して、柚香を見る。
「はい。そのことは、子爵様よりじきじきに承っております。でなくても、大丈夫ですよ。本校は主として華族のお嬢様方の教育のために建てられましたが、華族でなくても入学できます」
「はい。ありがとうございます」
学監は、柚香に直接聞く。
「あなたは何歳でいらっしゃる？　どこか小学校を出ましたか？」
「私は十二歳です。新潟は長岡の坂之上小学校を卒業しました」
柚香は、はきはきと答える。
「そうですか。では、これに必要事項を書いてください。そしてまた、明日、ここへいらしてください。明日は入学試験をしましょう」
「入学試験……」
「まあ、そんなに怖がらなくてもいいのよ。あなたが小学校でどれだけのことを学んだか、調べるだけですから。ほんとうは、入学試験はもう済んでいるのだけれど、明日、あなたのために特別にやってあげましょう。子爵様に頼まれましたので」
「はい……」
「それから。お母様」
と、彼女はゆきのの方へ向く。
「この学校の制服は、私の考案したえび茶のはかまにしてあります。ぞろぞろ着物を着て歩くより、ずっと活動的で、便利なのですよ。外へ出れば、人目で本校の生徒とわかりますしね。その制服、作ってあげてください。縫い手は、紹介します」
「はい……」
ゆきのは、恐縮しているばかりである。
下田歌子は、その経歴を考えれば、もう若い娘ではないはずであったが、一見したところ、年齢不詳、あでやかで美しく、知的な上流婦人であった。それも、職業婦人なのである。身につけているものも、立派なはかまである。当時、はかまはまだ、男たちの着るものであった。歌子は、因習にとらわれない。田舎者のゆきのなど、圧倒されてしまう。
一方、柚香の方は、物怖じもせず、はっきりと受け答えしている。華族のためのこの学校にもふさわしい生徒のようであった。

(５)子爵令嬢　波野川百合子

　明治四年（一八七一年）の廃藩置県で、武家社会は崩壊し、藩主（大名）たちは、東京に集められた。
　そして明治十七年（一八八四年）、華族令が発布された。旧藩主たちと、京から首都・東京に移されていた公家たちが、維新の功労者たちとともに、華族となる。これが当時の日本の上流階級、貴族である。
　また、華族といっても一様ではなく、その地位などに応じて、公爵、侯爵、伯爵、子爵、男爵に分けられる。階級社会である。
　また、この年、華族女学校が開校される。これは後に学習院に統合されるのだが、この時は学習院より分離されていた。ここへ、高橋柚香が入学した。

　学校は四月新学期なのに、一ヵ月遅れで特別に入学試験を行ってもらって入学した柚香は、初め、皆になじめず、一人さびしく勉強していた。そんな彼女にも友だちができる。
　放課後、生徒たちがそれぞれの家へ帰るとき、玄関でしくしく泣いている少女がいた。
「どうなさったの？」
　柚香がその少女に尋ねる。
「あ、下駄のはなおが切れたのね」
　柚香は、少女のはなおを直してやる。もともと手先の細かい仕事は、得意中の得意である。
「ほら、もう直ったでしょ。泣かないで」
　うつむいて泣いていた少女は、顔を上げて柚香を見る。
「ありがとう」
　小さな声で感謝する。
「私のうちは、誰も送り迎えに来てくれないの」
　と言う。
　公爵や侯爵、伯爵たちの令嬢たちには、馬車や人力車で送り迎えしてくれる使用人がいる。貧しいうちは、それができない。
「そんなこと。私だって、送り迎えの人はいないし、いつも一人なのよ。私は華族様じゃなくて、平民の娘だもん」
「へえぇ……私のうちは、波野川子爵というの」
「そう」
「私、お友だちができなくて、さみしかったの。私とお友だちになってくれる？」
「いいわ、こんな私でも良いのなら」
「もちろんよ。一緒に帰りましょ。お宅はどちら？」
「日本橋。そこで海産物問屋をしている雁屋という家で」
「あ、そこの娘なの？」
「ううん。雁屋は遠い親戚で、私は新潟から来た田舎者なの。うちはただの地主です」
「へえぇ……」

「送り迎えのある人はいいわね。私は自分で人力車を探すか、乗合馬車で行くかして、日本橋まで行かないと」
「日本橋は近いじゃない。うちは世田谷なの。ね、これからうちへ来ない？　ずっとお友だちを招待したかったの。でも、うちは子爵。公爵様や伯爵様のおうちの方を招待するわけにはいかないもんね」
「私はいいわよ。爵位もないうちの子でもいいんなら」
　で、この二人は乗合馬車で世田谷へ行く。
　この少女・波野川百合子の家は、世田谷のお屋敷町にあった。子爵は華族の中でも地位の低い方だが、そこはそれ、平民の家とは違い、広い大きな邸宅だった。もちろん洋館である。
「うちは、庭に、ばら園があるのよ」
　と百合子の言う通り、邸宅には大きなばら園があった。赤やピンクのばらがまぶしい。きちんと手入れされている。
「華族の体面を保つって、けっこう大変なのよ。私にはまだよくわからないけれど、お母様たちは、いつも苦労しているみたい。お金の苦労よ」
「ええっ？　こんなに立派なお庭があって？」
「ばらを育てるのは、大変なのよ。庭園の管理も、邸宅の清掃も、何でもお金がかかるの。私も、もっとお金持ちの、伯爵様あたりの娘に生まれれば良かったのに」
「ま、ぜいたくね」
「えっ、そう」
　こんな大人びた苦労話をしているが、二人は互いにまだ十二歳なのだ。
「わ、かくれんぼしよう！」
　百合子の提案で、二人はかくれんぼをする。
　一、二、三……と十まで数える間、両手で両目をおおっていた柚香、目を開けると、誰もいない。
「あ、どこ？　百合子ちゃん、ここはあなたのおうちだもん、隠れる場所を知っているのはあなたでしょ。私は知らない……」
　それでもあちこち探し回っていると、百合子は紅ばらの影に隠れていた。
「みいつけた、百合子ちゃん、みいつけた」
「うふふ」
　笑う百合子。
　そこへ百合子の母が、姿を見せた。
「まあ、ようこそ。百合子にお友だちができて、うれしいです。で、あなたはどちらの方？」
　またここでも華族でないことを告げなければならなくて、柚香は、少しひるんだ。
「私は新潟の田舎娘なんです。家は平民ですが、このたび華族女学校に入学することができまして」
「まあ、そうですか。では、ずっとこれから先も百合子と仲良くしてくださいましね。実は、うちの百合子はこれでも、引っ込み思案なところがありまして、なかなかお友だちもできなくて、

私も心配していたんですよ」

波野川家は、京の公家であったが、一口に公家といっても身分の差はあって、最下位の半家であった。

公家の位は、摂家、清華家、大臣家、羽林家（うりんけ）、名家、半家、と分かれている。半家というのは、特殊な技術を持って朝廷に仕えていた家である。ここにも、厳しい階級制度があった。

しかしこれは高橋柚香には、関係のないことである。彼女は、この波野川百合子と親しくなった。

（６）オッペケペー

　柚香と百合子は無二の親友となった。ちょうど少女が娘になる、多感な年頃である。二人は、世田谷の波野川邸、そして日本橋の雁屋とを親しく行き来した。周囲の人々は二人の友情をあたたかく見守っている。
　こうしてまたたくまに数年が過ぎ、二人は卒業まぢかになっていた。
　波野川子爵家の一人娘・百合子には、早くも縁談があった。
「爵位は、女には継げないの。でも、うちには女の私しか子がいなくて、だから私、今度、男爵様のご次男と見合いしなきゃならないの。私は家のために結婚しなきゃならないの」
「家のために……」
「そう。その方を好きになれたら最高だけれど、無理よね。無理をしたって……私だって、自分の好きな人と結婚したい。それがほんとの女の人生じゃなくって？」
「ほんとの女の人生って、それ、何かしら？　私の母も、好きな人に死なれて、泣く泣く父と結婚したっていう話よ。母もただ一人の家の跡継ぎだったから、家のために」
「家のためって？　家っていったいなあに？　私たちはなぜ、そんなに家に縛られなきゃならないの？」
「わからない……」
「わからないわね。私も自由に生きたい。学監先生のように」
「えっ？　学監先生のようにって？」
「あら、知らないの？　下田歌子先生といえば、知る人ぞ知る、伊藤博文公のお妾さんじゃない」
「ええっ？　そうだったの？　それで私たちに、良妻賢母になれって、よく言えるわね。でも私は、先生は未亡人だって聞いていたけれど」
「それは確かに、ご主人は病気で亡くなられたのよ。でも、先生は今、自由恋愛を楽しまれているって、もっぱらの評判よ」
「へえぇ……あの先生がねえ、私たちに、良妻賢母、良妻賢母って。だから私、それだけが自分の人生って思っていたけれど」
「愛に生きるのが、女の人生、私はそう思っていたいのに」
「そうね、恋って物語の中にしかないのかしらね。私たち、恋も知らずに結婚して、良き妻となり、賢き母となって……真実の愛も知らずに亡くなるのかしら……」
「良妻でも良いわ、せめて相手を自分で選べるのならね」
「そうねえ……」
　日曜日、二人は雁屋の奥で、そんな話をしていた。
「ね、ちょっと散歩しましょうか、ここは銀座も近いし。銀座って一度行ってみたいの」
　百合子がそう言うので、柚香は、雁屋の人たちにことわって、二人で散歩に出た。
　二人とも、下田歌子考案のえび茶のはかまを身につけているので、一目で女学生とわかる。この頃、どこの女学校でも、華族女学校にならって、えび茶のはかまを制服にしている。それで、女学生たちは、えび茶式部と呼ばれていた。えび茶というのは、紫がかった暗赤色のことである。

老舗の建ち並ぶ銀座の町は、人々でにぎわっていた。夜はガス灯が明るくつく。昼間もハイカラな町だ。外国人も多い。

街角に、看板がたっていた。

書生芝居　川上音二郎一座来る
　　　　　オッペケペー

と、書いてある。

「これ、何かしら？」
「お芝居みたいね」
「お芝居って……歌舞伎みたいな？」
「さあ、わからないけれど……」
「おもしろそうね」
「そうね、おもしろそう」
「ちょっと見てみる？」
「ええ、ちょっと見てみたい」

二人は、おそるおそる、その劇場に入る。

劇場は、満員だった。が、満員といっても、入っているのは皆、男たちである。男たちのはく息とたばこの煙でムンムンしている。

壇上で、これもはかま姿の男たちが、頭に赤いはちまきをし、大きな扇をかざして、華やかによそおって、歌い、踊っている。

権利幸福きらいな人に 自由湯（じゆうとう）をば飲ませたい
オッペケペー　オッペケペッポー　ペッポッポー
堅（かた）い上下（かみしも）角とれて　マンテルズボンに人力車
いきな束髪（そくはつ）　ボンネット
貴女（きじょ）に紳士の扮装（いでたち）で
上部（うわべ）の飾りはよいけれど 政治の思想が欠乏だ
　天地の真理がわからない　こころに自由のたねをまけ
オッペケペー　オッペケペッポー　ペッポッポー

「うわあ！」

と観客の男たちが声援する。

壮士踊りはなおも続く。

米価騰貴の今日に　細民困窮省みず　目深にかぶった高帽子
オッペケペー　オッペケペッポー　ペッポッポー
金の指輪に金時計　権門（けんもん）　貴顕（きけん）に膝を曲げ

芸者たいこに金を時き　内には米を倉につみ
同胞兄弟見殺しに　いくらじひなき欲心も 余り非道な　薄情な
但し冥土のおみやげかぢごくで閻魔(えんま)に面会し
わいろ使うて極楽へ　行けるかえ　ゆけないよ
オッペケペー　オッペケペッポー　ペッポッポー

さて、人々の喧噪にただ唖然とし、ボーっとしている二人の娘。彼女らに向かって、壇上にいた一人の青年が、近づいて来た。
「もしもし、そこなお嬢様。えび茶式部のお嬢様」
あっと二人はあわてて逃げだそうと出入り口に近づく。
と、青年は、二人に笑いかける。
「お嬢様、自由民権に興味ありますか？」
「ジユウミンケン？」
柚香は不思議がる。ジユウミンケンって何のこと？
「やっぱりそうでしたか。自由民権の何たるかもご存じない。深窓のご令嬢なら無理もない」
「あのう、私たち……」
「いや、いいんですよ。お嬢様方に罪はない。今の日本政府は腐っている。薩長ばかりがこの国の政治を私物化して。ぼくたちは、この国の自由のために戦っているんです」
「この国の自由のために？」
「そうです、それをわかってほしいのです」
「……」
青年と話している柚香を、百合子がさえぎる。
「怖い。もう行きましょ、行きましょ」
禁断の木の実を目の前にして、逃げようとする子爵令嬢波野川百合子。好奇心を隠しきれない高橋柚香。百合子に引かれて、この場は去った。

(７)運命の再会

　十七歳の春、柚香は、めでたく華族女学校を卒業した。学校へ入学できるよう推薦してくれた牧野子爵には、卒業の報告とお礼に参上した。
　さて、ここで貝喰新田の父母の許に帰らねばならないのだが、雁屋の主人が娘一人の旅を不安がった。誰かついていけばいいのだが……奉公人には任しきれず、鈴正の主人が越後米を運んで来るのは、晩秋である。まだ半年以上も間がある。
「私が、商売物の海産物を、越後から運んで来ればいいのだが。ちょうど日本海の海産物も開拓したいと思っていたところなのだが……今、忙しくて……ま、そのうち時間もできるだろうから、待っていてほしい」
　と、主人は言う。
　柚香は、静かな田舎も好きだが、都会のにぎわいも好きだ。だから、しばらく東京にとどまることに、さびしさや苦痛はなかった。
　それが、母親のゆきのから、父の義三郎が病気なのですぐ帰るよう、手紙が来た。あわてた雁屋は、柚香を連れ、日本海の海産物を仕入れに越後に行く。
　長岡で、鈴正の人たちと、挨拶する。柚香の弟の竜之介は、あと一年ほどで坂之上小学校を卒業する。来年は、長岡の洋学校へ進学する予定だ。
　千鳥は鈴正にはいなかった。高橋家にすでに嫁いでいたのだ。長男・大助ももう産まれているという。
　挨拶やつもる話はいろいろあったが、義三郎の病気が気がかりだ。医者の見立てでは、胃に悪性のできものができていて、それが大きくなり、また、全身に広がっているという。当時、治す方法はない。
　柚香は大急ぎで、雁屋とともに、家に帰る。
　母が出てきた。ゆきのと雁屋の主人とは、遠い親戚とはいえ、ここで初対面。互いに挨拶をかわす。
「柚香……すっかり大きくなって。娘らしくなったこと」
　娘を見て、母は涙する。
　娘は気が気でない。
「おとっつぁまは？　おとっつぁまは、どうなさったの？」
「それがねえ……」
　病人の状態がよくないのだ。
「痛い、痛い」
　と激痛に苦しんでいる。雁屋にも、ちゃんと挨拶するどころでない。
　そして雁屋が日本海の方に去った後、ついに臨終の日が来た。
「ゆきのう……ゆきのう……」
　と、妻の名を呼ぶ。
「お前様……」
「あの世へ逝ったら、もう、ゆきのはわしの嫁ではないのう……」
「えっ、そんな……」
「ゆきのう……ゆきのう……」
　激痛の中で妻の名を呼びながら、義三郎は逝った。
「お前様！」

妻は夫の亡骸に抱きついて、大声で泣いた。
「堪忍して……堪忍して……お前様！」
義三郎は、生涯、ゆきのだけを愛し続けていた。報われぬ恋であった。結婚していたとて、何ほどのことがあろう。夫婦の生活など、何であろう。ただ一瞬の心の交流を、夫は求め続けていたのだ。
深い後悔と罪の意識が、妻を打ちのめす。そうだ、自分は悪い妻だった。不義者よりも悪い妻だったのだ……。

長男の俊男が家を継ぐ。
彼は、地主の高橋家の主人で、大学進学や就職は考えなかった。地主の家の仕事など、いっぱいあるわけがないのに、彼はいつも忙しかった。あちこちに出かけて、あぶなっかしい若者仲間とつきあっていた。母は、それを不安がる。
「ジユウミンケンのう……」
母は娘に愚痴をこぼす。
「あたしは、ジユウミンケンなんて考えたこともないのに……」
「えっ、ジユウミンケン？　あんにゃはその仲間とつきあっているの？」
「その仲間って？　お前、何か、その人たちのことを知っておるの？」
「ううん、知っているというほどのことはないんだけれど、東京にいたとき、ちょっと」
娘も、その人たちについては、ほとんど知らない。

ここで自由民権について、簡単に述べてみると、おおよそ次のようになる。
一九六八年（慶応四年から明治元年）三月、維新戦争の中で、五箇条の誓文が発布された。その第一条は「広く会議を興し、万機公論に決すべし」と公論を宣言している。
しかし、広く会議は興されなかった。徳川幕府に変わって、専制的な薩長政府ができただけである。
その上、七二年（明治五年）に学制と徴兵令が出され、七三年（明治六年）には地租改正令が出される。国民は、子供たちを学校にやる義務があり、国家のために兵役を負い、その上税金まで納めさせられる。こんなに収奪されるのに、国会もない。一部の豪農や士族たちは、これを怒り、七四年（明治七年）民選議院設立建白書を提出、ここから自由民権運動が盛んになる。欧米流の民主主義思想が、ようやく日本でも始まったのである。
豪農や士族たちは、熱心に自由主義運動を繰り広げた。この闘士たちのことを『壮士』と呼ぶ。「オッペケペー」と歌いながら自由民権思想を広める川上音二郎などの壮士芝居（書生芝居）もあった。だが、戦ったのは、国民のごく一部の青年たちだった。
政府も妥協しなければならず、八九年（明治二十二年）ついに大日本帝国憲法が発布され、翌九十年（明治二十三年）には、第一回総選挙が行われる。これは、選挙権を持つ人がごく一部の富裕層に限られていて、民主主義とはとても言えないものであったが、それでも、とにかく、議会が開かれる。そうして、その後、自由民権運動は徐々に衰退していくのだが、このお話は、憲法と選挙の頃のことである。

俊男は新潟県の各地にとんで、自由民権運動をしていた。東京から来たという壮士・三枝義男を家に連れてきた。
「おっか様、柚香、千鳥、この方が俺の同志・三枝義男さだて。俺同様、よろしくお願えします」
三枝義男は、瞳の涼やかな好青年だった。いつかどこかで見たような……どこだったろう？……と、

柚香は、記憶の糸をたぐり寄せる。
「現在、日本に必要なのは、自由民権の思想と行動です」
　と、彼は歯切れの良い明るい調子で口を開き、突然、歌いながら踊り出す。
「オッペケペー　オッペケペッポー　ペッポッポー」
「ああ、あなた様」
　柚香は、彼に気づく。
「東京でお会いしましたわね」
「あ、あのときのえび茶式部」
　彼も気がつく。
　二人は再会した。
　運命の出会いだった。

(８)恋

三枝義男が兄の俊男と違うところは、女の柚香に、自由民権のことを、簡単にかみくだいて話してくれたことだった。この時代、女性は政治や政治運動から疎外されていた。女の仕事は、子産み、子育て、家事労働と決まっていた。百姓の女たちは、男と同じ野良仕事をしていたが、その上で、家事や育児もしなければならず、過酷な毎日に耐えていた。

柚香は、上流階級の娘たちと同じ教育を受けたが、卒業しても、職業に就くことはできなかった。家の外に、彼女にふさわしい仕事はなかった。

「私、学校でも、良妻賢母、良妻賢母と命じられて育ちました。私にも、どなたかの良き妻となり、子を産んで、賢き母となる以外、生きる道はないのでしょうか？」

と訴える柚香に、義男は

「うーん」

と腕組みして、答えを探す。

「女の人たちにも、自由は必要なんですね。昔、維新の志士たちを支えた女性たちはいましたが、皆、男たちの陰にいただけで、自ら活動した女性となると、ごく少数ですなあ。現在の自由民権家たちにしても、女性のことは、考えていないし、男尊女卑のこの社会で、女性が何かやりとげるのは、きわめて難しいです。これは、実は、大きな損失です。人口の半分は女性で、その中には豊かな才能を持った人たちも多いのに、社会が彼女たちの才能を開花させない。実にもったいないことです」

明治の世。因習に囚われている自由民権家たちの多くは、男女平等の思想など、はなっから持っていない。女を愛したり、妻を持ったりしても、それはそれだけのことである。生まれつき女は男に劣る存在であると思っていて、その考えを疑ってみたこともない。その中で、三枝義男は違っていた。

「福沢さんも言っていますよ、天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず、とね。天は女の上に男を作らず、女の下に男を作らず、と言い換えればいい。ぼくはこの先、きっと、女性が自由を語ることのできる社会が来ると思っています」

柚香は、瞳を輝かせて義男の言葉を聞いた。こういうことを言う人がいるとは、驚きだった。周囲の人々は、皆、男尊女卑を当然のこととしている。

男たちの自由民権運動によって、富裕な男たちは国会議員の選挙権を得たが、貧しい一般大衆や、すべての女たちは、その権利を持たない。権利がなくて、義務ばかりある。窮屈な世の中である。

その中で、三枝義男の存在はまぶしく、ちょうど年頃の柚香は、彼にひかれてゆく……。

彼がいったい何者なのか、住まいはどこで、どういう仕事をしているのか、どうやって生活しているのか、等々、何もわからない。正確な年齢さえわからないのだ。しかし、そういったことは、恋に落ちるには関係がない。

好き、と口に出してみる。好きだ。三枝さんが好きだ。だが、柚香は、まだ十八歳なのだ。恋を知る年頃には十分だが、男女の愛が何をもたらすか、何もわかっていないのだった。

「ぼくは、一ヵ所に定住して、妻を迎え、子を成す、そういう人生は選べないんです。いったい

そういう人生に何の価値があるんです？　ぼくは、一生、自由主義者として、民権家として生きていくつもりです」
　と、彼は言う。
　悲しくて、彼女は泣いてしまう。妻になりたい、三枝さんの妻になりたい私なのに……彼から肩すかしをされてしまったようだ。
　涙をうかべて泣いている彼女の前で、彼は困ってしまう。どうしたらいいか……男として、彼女の気持ちを無視してもいいのか？……胸苦しい思いが、こみあげてくる。好きだ、俺もこの娘が好きだ……。
「柚香さん」
　と、彼は娘の名を呼ぶ。
「今夜は月もきれいですね」
「……」
「一緒に月まで行きませんか？」
「えっ？」
　夜空では、丸い満月がにこっと微笑しているようだった。
「月まで行きましょう。ぼくと手をとりあって」
「……」

(９)女の肉体というものは……

　愛を得て、柚香は幸せだった。が、ある日、三枝義男は新潟の町へ行ったまま、帰って来なかった。
　でも、あの人は帰って来る、きっと、ぜったいに、私のところに帰って来る……と信じ続けている妹に、兄の俊男は真実を告げる決心をした。
　義男はここを去る前、俊男に言っていたという……自分はこれ以上ここにいると、柚香への愛に溺れてしまう、自分は生涯、自由のために戦って生きるつもりで、女にかかずりあっている閑はないのだ、自分は妻子を持って平穏に生きる人生は選ばない、そのことはちゃんと柚香に言ってある、男の身勝手かもしれないが、これは認めてほしい、大義のためである、と。
　聞いて、柚香は泣くしかなかった。
　自分は、他の大勢の女たちとは違う、と思ってきた。他の女は、自由主義者として生きようとしている彼には邪魔かもしれないが、自分は彼の邪魔をしようとは思わないし、そういったことに理解のある女なのだ、と思っていたのだが。自分も他の女たちと同様、邪魔者として捨てられるのか？
　悲しかった。
　そして、それ以上につらい人生が、彼女を待ちかまえていたのだ。

　ゆきのは、娘・柚香と客人・三枝義男との恋に、気づいていた。しかし、夫亡き今、相談する相手もいない……。
　ゆきのは、娘の若さがまぶしかった。自分にも、若い時代があり、切ない初恋もあったけれど……でも、自分は未通女（処女）だった、その点、どうなのか？　女の肉体のどうしようもない現実を、娘はどこまで知っているのだろうか？
　母として冷静に観察していると、柚香は台所で吐き気をもようしていることがあり、食卓でも酢の物など好んで食べる。
　短刀直流に聞いてみた。
「お前、まさか、妊娠しているのではねえだろうね？」
　娘は、はっとした。それはまだ、十八歳の彼女が、考えてみたこともない事態だった。
「おっか様……」
　柚香は、うろたえる。
「相手は三枝さか？」
「……」
「そうなんだね。三枝さなんだね」
「……」
「で、これから、お前はどうするつもりだね？」
　どうするつもりかと問われても、答えることができない。三枝に去られて、悲しい中で、柚香はすべてあきらめることにしていたのだ。自分に決められたように普通の結婚をし、普通に子を産み、何もかも普通に人生を送るつもりでいたのだ。ずっと反発していた良妻賢母の生き方、そ

こにも何か得るものがあるかもしれない、と思っていたのだ。
　ところが、自分を縛っている人生の掟に嫌悪を感じてきたのに、今、その生き方さえできなくなっていたのである。
　ゆきのも、途方に暮れていた。結婚もしないのに、子を身ごもってしまった娘。しかもその相手は、よそへ行ったまま。どこにいるのやら、連絡の取りようもない……。
　自分のことでも……父母が自分のことでどれだけ心を痛めてきたか、ゆきのも、今になってようやくわかったのだった。
　しかし、くよくよしていても始まらない。これからどう善後策をとっていくかだ。
「あのね、柚香、前にちらっと聞いたことがあるんだけれどね……お産婆さんに頼めば、水子にして流してくれるとか……」
「そんなの、嫌！」
　柚香は、大声で泣いた。
「嫌って言ってもねえ、お前、ここは他にどうしようもないじゃない？」
「嫌！　嫌！　ぜったいに嫌！　この子を殺すなら、私も殺して！　私も死ぬ！　死んでもこの子を守る！」
　涙がどんどんと目にあふれ、顔が涙でぐしゃぐしゃになる。この子は三枝さの子だ。彼と自分が愛し合って、この世に産まれ出て来ようとしている、大切な命なのだ！　この子を守りたい。三枝さを守りたい！
　しかし、ゆきのにしてみれば、今、頼りにできる者が誰もいず、相談もできず、ただ困っているのだった。
　嫁の千鳥がいた。
「あたしが引き受けますて」
　母娘の話を聞きつけて、千鳥が、はっきりと言った。
「あたしが、うちの人とあたしの間にできた子として、実子として育てますて」
　柚香は、驚いた。女学校を出た彼女は、小学校しか出ていない鈴正の娘・千鳥を、多少あなどっていたきらいがある。その千鳥が、はっきりと言うのだ。小姑として煙ったがっているはずの自分を、助けてくれるというのだ。
「あたしたちには、まだ、大助しか子がいなくて、二番目がほしいなあって、二人で相談していたところなんですて。ちょうど良かったです」
「ありがとうよ、千鳥、ほんにありがとう」
　姑であるゆきのも、率直に感謝する。これで千鳥は、姑と小姑から、一本取った。
　少し遠出していた俊男も帰ってきて、事態の進展を聞き、産まれた子を自分たち夫婦の実子として育てることに、快く同意した。三枝義男は、俊男が家に連れてきた男だったので、彼はまったく面目なかったのである。
「俺の二番目の子ができるんだ」
　と、彼は周囲の皆に言ってまわった。人々はそれを祝福してくれた。
　が、中には何か怪訝がる人もいたようで、俊男の妻のお腹は大きくならないのに、妹のお腹が人目につくのか、と、この家族は不安になってきた。
「どうしましょうねえ」
「どうすべえか」

ゆきのと俊男は、困ってしまい、なんとか柚香と千鳥を人目に付かないところに隠したかった。

で、村の商店・貝喰屋のことを思い出した。貝喰屋の女房は、新潟県は弥彦山の近くにある岩室温泉の出である。貝喰屋がそこへ仕入れに行って、その女性と知り合いになり、周囲に薦められて結婚したのである。

ゆきのと俊男とは、貝喰屋に頼み込んで、周囲に内緒で柚香と千鳥の二人を、岩室温泉に湯治させることにした。

（１０）霊雁の湯

　岩室温泉の歴史は古い。
　一七一三年元旦、庄屋の高橋庄右衛門の枕元に、白髪の老人が来て、村はずれの松の下の岩石のところに霊泉があり、これで湯浴みすると、病気が治る、と告げた。
　庄右衛門が探すと、温かい湯がわき出ていて、一羽の傷ついた雁が、それにつかっていた。やがて雁は病癒えて、仲間のところに飛び去って行った。
　ここで人々は、そのお湯を引いて、温泉宿を作り、霊雁の湯、とした。これが岩室温泉である。
　江戸時代、岩室は北国街道の宿場町でもあり、近くの弥彦神社の参詣客も来て、大勢の人々でにぎわっていた。芸妓も多い。
　日本では全国各地に温泉は多い。柚香の知っているだけでも、水上温泉やここ岩室温泉がある。そして、この一家は自分たちが温泉に近づいていくことを、まだ知らない。

　冬が終わろうとしていた。ゆきのと俊男とは、柚香と千鳥とを連れ、まだほのかに雪の残った道を歩いて岩室温泉に行き、貝喰屋の紹介してくれた旅館・夕月館を訪ねた。
「ごめんくだせえまし、貝喰新田の高橋でごぜえます」
「はい、貝喰屋からお話は聞いております。まだ雪も残っておりますのに、ようお越しくださいました」
　夕月館の女将は、四十代の働き盛り。客の事情は知っても、そこらでおしゃべりしたりしない、口の堅い女性だった。
「実は、私ども、ちょっと込み入った事情がありまして、この娘・柚香が悪い男にだまされてしまい……あのう、こっちは嫁の千鳥でごぜえますが、これから産まれてくる私の孫は、この嫁が産むものとしてくだせえ……おねげえばかりで、もうしわけねえですが、あの、そこを何とか……あの、人に知られぬように……」
「わかりました。この辺でも、芸妓が多いため、内緒で子を産むことも、なくはなくて、はい、芸妓でも子を産むのは大変なのに、まして堅気のお嬢様が……ほんとに大変ですのう」
「はい、そうおっしゃっていただけると、ほんに助かります。半年ほど、この二人を湯治させてくだせえ」
「わかりました、おやすいご用で。うちは旅館ですので、何の心配もいりませんて。ここにはおかしな噂をたてる者もおりませんし」
「はい、おねげえいたします」
　大助のことは、俊男が千鳥に言った。
「大助のことは、しんぺえねえ。産まれてもう丸四年にもなるし、俺やおっか様や乳母もいるし、大丈夫、なーんにもしんぺえいらねえて。お前も、ここでゆっくり休んで、湯治を楽しみ、羽を伸ばして楽しんでくれや。家に帰ったら、また忙しい毎日が待っているだに」
　そうして、母と兄は帰っていく。

柚香は、千鳥がうらやましかった。何の心配もなく、地主の家に嫁いできて、男の子を成し、今は小姑の自分に付き添ってきている……うらやましい境涯だ。
二人は家にいたときは、さして仲の良い義姉妹ではなかったが、今の柚香にとっては、この義姉一人が頼みの綱だった。
うつうつしている義妹に、千鳥はやさしく語りかける。
「柚香様、どうなさいました？　もっと元気を出しなせえ。赤ちゃんのためにも」
「赤ちゃんのため？」
「そうですて。すべては赤ちゃんのためですて」
そんなこと。自分が赤子と身二つになれば、この兄嫁はその赤子を奪ってしまうのではないか。
日陰者の悩みを知らぬ、いつも日の当たるところにいる、『妻』という名の女たち。この『妻』たちになど、何がわかる！
柚香の目に涙があふれ、ほほを伝って、落ちる。
「あたし……あたし、もう人生のお終いで……」
「何をおっしゃいます、柚香様。お前様はまだ十九歳じゃありませんか。人生はこれからですて」
「だって、もう、お嫁に行けないし……」
「お嫁に行けない……でも、お前様は、良妻賢母になぞなりたくない、お嫁にも行きたくないって、そうおっしゃっていたではねえですか？」
柚香の心の内には、「お嫁に行ける」普通の女たちへの羨望がうずまいているのだった。
千鳥は続ける。
「お嫁に行きたい……そんなら、何も心配することねえじゃねえですか。赤ちゃんは、俊男さとあたしの子として育てるのだし、わざわざこんな遠いところに来て噂する者など、そんな閑人はどこにもおりませんて。柚香様は、心配せずに、どこへでも好きなところへお嫁に行けますて。そのために、あたしがここに一緒におるんじゃねえですか」
彼女は、義妹を勇気づける。
「子供一人産んで、それで女の人生は終わりなんて、まだ二十歳にもなんねえのに、そんなことあってたまるもんですか！」
実を言えば、千鳥の方も柚香がうらやましいのだ。
「柚香様は、なかなか入れない華族女学校に入られて、勉強なさって。あたしの方こそ、うらやましいですて」
「勉強して何になるんだて？　何か仕事に就けるんだて？」
「仕事……お前様は、お茶やお花の免状も持っておられるし、料理はおろか、裁縫も、手芸も、何でも人がまねできねえほど、得意じゃねえですか？」
確かに柚香は、女学校で、女一通りのことは学んだし、お茶とお花の免状は、在学中にとってある。
「無学なあたしたちにできねえことを、いっぺえ、いろんなことができて、それで十八や十九で人生が終わりだなんて、そんなことは決してねえですて」

桜のいっぱい咲く春が来て、去り、やがて産み月の近い初夏となった。
夕月館の女将に勧められて、夜、二人は近くの川に行く。暗闇の中で、蛍が光を投げながら、乱舞している。

沢の近くに、冬妻清水や聖人清水があり、このきれいな清水で蛍が育っている。周囲を舞い踊っている、いっぱいの冬妻蛍たち。二人は見ほれていた。
「あ……」
柚香が、お腹を押さえてしゃがみ込む。
「痛！……」
「あ、大丈夫？　ほら、ここにつかまって」
千鳥は義妹の肩を抱き、自分につかまらせて、宿へ連れて行く。
「どうなさったん？」
女将が出て来る。
「あの、赤ちゃんが……」
「あっ、それは大変！」
女将は二人を部屋へ連れていき、柚香を寝かせ、小僧に産婆を迎えに行かせる。

苦しかった。激しい激痛の中で、柚香は、自分を捨てて去った憎い男を思った。殺してやりたい！殺してやりたいほどに、彼が憎く、そして慕わしかった。
「オギャー！」
と、元気な産声。
「おめでとうごぜえます。かわいい女の赤ちゃんですよ」
産婆の声がする。
終わった、そうだ、終わったんだ、私はとうとう母になったんだ、と虚脱状態の中で、目の前に蛍が飛んでいるのに気がついた。
蛍……。
何かの合図だろうか？
蛍子、と書いて、「ケイコ」と読む。それを赤ん坊の名前にした。
国では、まもなく清国との戦争が始まろうとしていた。

（１１）百合子の嘆き

一八九四年（明治二十七年）日清戦争が始まった。

ゆきのが秘かに恐れていたことが、現実になった。長男・俊男と次男・竜之介の徴兵問題である。

始め、一八七二年（明治五年）に徴兵令は出されたが、この時点ではゆきのは何も心配しなくて済んだ。なにしろ、この時は、家の世帯主と跡継ぎとは徴兵されないで済んだので、年をくった義三郎はもちろんのこと、長男で跡継ぎの俊男もまだ産まれたばかりだったが、二十歳になっても徴兵されないで済む、と思われた。後、次男の竜之介も産まれたが、これも、徴兵の代わりにお金（当時の金で二百七十円）を払えば良かったのだ。その金額はかなりのものであったが、大地主の高橋家が負担できないほどの額ではなかったのだ。

だが、この徴兵令は、七九年（明治十二年）、八三年（明治十六年）、そして八九年（明治二十二年）と改正され、当初とはまるで違った国民皆兵制が決められたのだ。

二十歳になって、俊男は兵隊検査を受け、甲種合格となったが、抽選にはずれたので、入隊しなくて済んだ。この時はまだ、抽選に当たらなければ入営しなくて良かったのである。当然、青年たちは、皆、くじに当たらぬよう、神仏にお願いした。

しかし、現実の戦争が始まってしまった……。

もうここで逃れることはできず、俊男は出征した。

母・ゆきの、妻・千鳥、幼い息子の大助と、養女の蛍子。それに、妹の柚香と弟の竜之介。家族たちは、毎日、毎日、俊男の無事帰還を祈った。ゆきのと千鳥とは、まるで争うように、毎日毎日お百度を踏んで、祈った。祈ることは、ただ一つ、俊男の無事帰還である。

三枝義男も出征したのだろうか？……と、柚香は、秘かに彼の身を案じてもいた。彼はどうなったのだろう？

彼女は、高橋家で、ひどくあいまいな地位にいた。高橋家の一人娘には変わりないが、年ばかりくって、嫁にも行かない変わり者。彼女は、幼い蛍子には、できるだけ接触しないよう、気をつけていた。千鳥が柚香から蛍子を遠ざけるようにしていたのではない、柚香の方から、幼い娘に近づかないよう、気をつけていたのだ。賢明な彼女は、娘とは、距離を持って接していた。

母のゆきのが、縁談を見つけてきた。が、肝心の柚香が、乗り気でない。嫁に行って苦労するなど、ごめんである。

新聞で、日清の戦況が次々と報じられてくる。大国・清国が破れ、小国・日本が勝った。人々は戦勝の報に酔いしれて、次々と帰還してくる兵士たちを歓迎する。

俊男も、無事、帰って来た！

家族の喜び。大助が父親に飛びつき、幼い蛍子も彼に甘える。ゆきのもうれし涙をぬぐう。千鳥も柚香も竜之介も、ほっとする。

だが、日本中、幸せな家族ばかりいたのではない。

兄の帰還を祝っていた柚香の所に、一通の手紙が舞い込んだ。それは、彼女の女学校時代の親友、子爵令嬢・波野川百合子からのものだった。

柚香ちゃん、お元気ですか？　今、何をなさってる？
私は悲しい思いに耐えています。
海軍中尉だったうちの人が、戦死しました。
私は家のために結婚して、好きでもない人と同衾しました。
それでもね、柚香ちゃん、いくら好きでない人でもね、私にはこの世でただ一人、と思っていた人でした。
夫は私にやさしくしてくれました。それは、婿養子だったからかも　　しれないけれど。
好きになって結婚したんでなくても、長い年月の間には、夫婦としての愛情が芽生えてきます。
それに、私は、家のためにと思い、心から夫に尽くしたのです。好きになろう、好きになろう、と努力してきました。
その温かい思いが二人の心に生まれたとき、国は、うちの人を戦争にとってしまったのです。
私のお腹に命が芽生えていることも知らず、うちの人は戦死しました。
女の子が産まれ、さと子と名付けました。でも、この子は生まれつき、父を知らない子です。
そして、産まれたのが女の子のため、私はまた、周囲から再婚を無理強いされています。私は、華族の次男さんとか、三男さんとかと、どうしても結婚しなければなりません。
父も、母も、周囲も、私に男の子を産ませることばかり考えているのです。
私はこんなに悲しいのに、今となっては後悔ばかりですが、あのときこうしてあげていたら、とか、このときこうしてあげていたら、とか、至らなかった妻として後悔しているのに、うちの人がこんなに恋しく、慕わしいのに、周囲はそれを認めてくれず、また新しい男をあてがおうとするのです。
そして、これは、首尾良く私が男の子を産むまで続くのです。
ね、この境涯って、お女郎さんの境涯に何か似ていません？
私たちを悲しませる戦争。男を殺し、女を泣かせる。戦争って、いったいなんのためにあるのですか？
なぜ国民は勝利の美酒に酔いしれるのでしょう？　その陰に、泣くしかない女たちがいるというのに。
私の悲しみは、誰がいやしてくれるのでしょう？
次の夫がいやしてくれますか？　前の夫と同様、私を愛してくれるでしょうか？
いいえ、愛してくれても……その人も、きっと、軍人なのです。華族は軍人になるよう求められているのです。そして、きっと、同じことが起こるのです。
私は、戦争のない国に行き、平和の中で夫と、産まれてくる子供と、家族だけで生きたいのです。
こんなささやかな願いなのに、国は聞いてくれません。それなら、私には、国なんて必要ありません。どこかの無人島に行って、暮らしたいです。
涙で、この手紙、ぐしょぐしょに濡れてしまいました。書き直しても、また濡れるでしょう。このまま出します。
誰も私の味方をしてくれませんが、柚香ちゃんは、私の気持ち、わかってくれるわね？

人もうらやむ子爵令嬢でも、不幸なんだなあ、と柚香は思う。つらい人生の重荷を背負って、幸せを求めている百合子。残酷な戦争に抗って、必死で生きている。
それにひきかえ、自分はどうだろう？……

兄は帰ってきたけれど、自分は、母の言いつけ通りに嫁にも行かず、大家族制度に浸かって、兄の世話になり、何もしていない。
何もしない自分。人生を無駄に過ごしている自分。これでいいのか？
考えに考えて、柚香は、阪之上小学校の元校長、恩師の由利巌を訪ねた。無沙汰の挨拶をして、彼女は働いて自活したいという自分の気持ちを述べた。
「働きたいねえ……そうだなあ、女でもできる仕事ねえ」
「あの、教育方面なら……女教師っているようですが」
「ああ、そうか、教育方面なあ……それで私を頼って来てくれたのか。ま、わかった。なんとか探してみよう」
その場では困ったようだった由利であるが、柚香には、他に頼る人もいない。
まもなく、由利が、女紅場（じょこうば）の教師の口を探してくれた。女紅場とは、女たちに手芸、裁縫、料理などを教える学校である。
そこで、柚香は、高橋家から独立し、一人で長岡市内に下宿し、女紅場の職に就いた。
女紅場は、後に長岡の女学校となる。

（１２）千鳥の死

『日本書紀』に、越の国から天皇へ、『燃える水』と『燃える土』とが献上された、と記されている。これは、石油と石炭のことであろう。

柏崎市西山町には、この石油が自然にわきいでてくるところがあった。ここでは、草生水と呼ばれており、人々はこれを菜種油のように灯油にして使っていた。

明治の世、この石油が脚光をあび、多くの人々がこれを探す石油ブームがまきおこった。

一八八八年（明治二十一年）五月、この西山町に日本石油という会社が誕生し、九月にはすぐ近くの出雲崎町尼瀬に移転した。この中心人物は、元新潟県会議員内藤久寛である。彼は殖産興業の志を持って、新潟県で活発に働いていた。

尼瀬の海岸では、石油が波にのって浮遊してくる。これに目をつけた内藤は、ここで世界初の海底油田を掘削する。

石油掘削は、初めは手掘りでやっていたのだが、これでは遅々として進まず、新しい機械による掘削が行われるようになった。尼瀬油田は、めざましく発展する。

日清戦争前後のことである。

尼瀬油田の発展をうらやんでいる二人の青年がいた。高橋家の当主・高橋俊男と、この親戚の松田豊太郎とである。

親戚というのは、高橋家の二の分家の娘・弥生が、出雲崎の松田家に嫁ぎ、この長男・豊太郎を含めて、三男二女を産んだのである。

「石油っていいなあ」

「俺も、内藤様みてえに、石油王になりてえなあ」

と、二人は歓談。

二人はともに日清戦争に出征し、無事に帰ってきたので、国が近代化に向けて走っている、今は富国強兵の時代だと、よく知っていた。石油は、この時代の花形産業である。

出雲崎の松田家に長逗留して、居候を決め込んでいる俊男。妻子は貝喰新田の本家に置いてきた。

松田家の末娘・千代香。まだ十五歳のかわいらしい、素直な娘だった。千代香は、いいなあ……と俊男は彼女にひかれる。妻子ある身でありながら。千代香がそばに来ると、ぱっと光がさすようだ。

俊男は、彼女に声をかけてみる。

「嬢ちゃん、いくつ？」

「十五よ」

千代香はあどけなく答える。

そういえば、千鳥が自分のところに来たのも、十五歳の春だった。あのときは、自分も千鳥が好きで好きでたまらなかったのだが……。

また、たずねてみる。

「嬢ちゃんは、どこへお嫁に行きたいのかな？」

すると、彼女は、

「あたし、おにいさんのところへお嫁に行きたい」
　瞳をいっぱいに輝かせて、答える。おにいさんとは、俊男のことだ。
「ええっ、そう？　……困ったな。おにいさんには、もう、奥さんがいるんだよ」
「ええっ……」
　千代香は、涙顔。
「でも、かわいいね、千代香ちゃんは」
　まるでどこかへ置き忘れてきた青春の日が、よみがえってくるようだ。
　俊男は、千鳥のことなど忘れ、松田家に居座り、豊太郎とともに尼瀬油田へ行って、日本石油に入社。現場の労働者として働く。ここで働くのは、機械掘りの方法を学びとるためである。社長の内藤久寛はおうような性格なので、二人の若者の魂胆には気がつかない。現代ならば、若者のアルバイトみたいなものである。

　戦争の終わり頃から、千鳥は胸を病んでいた。貝喰新田の屋敷の奥に、一人、寝かされていた。病気がうつるといけないからと、子供たち・大助と蛍子とは、そばから遠ざけられていた。
　それでも、ゆきのは、なんとかこの嫁の病気を治してやりたいと、滋養のあるものをと言われるので、鶏を飼い、その卵を毎日、食べさせていた。
「義母様（おっかさま）、ごめんなせえ……」
　声もきれぎれに千鳥が言う。
「主婦の仕事も何もできねえで、こんな病になってしもうて……子供たちのことも、義母様にまかせっきりで。つれえです」
「いいんよ、心配しねえでいいんよ、おいしいものをたんと食べて、早く良くなってね。俊男が帰ってきたら、元気になって出迎えてやってね」
「はい……」
　その俊男は、出雲崎へ行ったまま、帰ってこない。千鳥は、きっと出雲崎に若くてきれいな少女がいるのではないか、と邪推する。別に人に言われたわけではないが、そんな気がするのだ。
　短い人生だったなあ……と思う。せめて、子供たちの顔を見たい……それも、許されない。
　もう自分は、夫から遺棄されたのだ、これから先、生きていてもしようがない……とも思う。
　義妹・柚香の悲しみも、今はよく理解できた。男は身軽で、女のことなど、一時の楽しみとしか思っていないのではないか？……愛してくれても、それは一時（いっとき）のことではないか。責任を持ってほしいのではない、ただ自分のところに帰ってきてほしいのだ、ただそれだけなのに……。目に涙があふれ出る。死んで、今度産まれてくるときは、女なんかに産まれてきたくはない。
　鈴正の父親がやってきた。ゆきのをつかまえて抗議する。
「千鳥のこと、俊男くんには知らせてくださったんでしょうな？」
「はい……出雲崎には何度も手紙を出しましたが……返事もなく……すみません、もうしわけありません……」
「わしは、高橋さとは、先祖代々からのお知り合いで、娘を大事にしてくれると思ったからこそ、こちらに嫁がせたんですぞ」

「はい、それはもう……もうしわけありません……」
「あなたに謝られてもしかたないな。こうなったら、自分で出雲崎へ行ってみるより他にないな」
「すみません……不肖の息子のこと、どうぞお好きになさってください」
　しかし、本人の千鳥は、それをいやがった。
「おとっつぁま、そんな……うちの人のところには行かないで。連れて来ないで。うちの人は、自分の夢である石油の仕事に夢中で、そばにはきっと若くて美しい女の人もいるんでしょう……男は若くて美しい女が好き……あたしも、前はその自信があったけれど、今はもう、病気になって……病みさらばえた醜い自分の姿など、うちの人にだけは、見せたくないんです。うちの人の心の内には、いつまでも、十五歳でこちらへ嫁に来たときのままでいたいんです……ごめんなせえ、おとっつぁま、これがあたしの気持ちで……」
　本人がそう言うので、父親もそれ以上手出しができなかった。
　うわごとで、
「あんたぁ……あんたぁ……」
　と、夫を呼びながら、千鳥は逝った。
　不孝者の俊男は、妻の葬儀にも来なかった。

(13)日露戦争前夜

母親としてゆきのには、まだ、心配事があった。それは、次男・竜之介の兵役義務のことである。日清戦争は終わったが、また、いつ何時、戦争が起こらないとも限らない。まもなく二十歳になる彼は、兵隊検査をどう考えているのだろう？

その竜之介は、長岡洋学校を卒業して、家に帰っていた。家族ともあまりうち解けず、本ばかり読んでいる。兄の居候になると決め込んで、就職もせず、上級学校にも進学しない。毎日、何やら難しそうな本を読み、在野の学者みたいな生活をしている。ときどき、長岡の町まで外出しているが、新しい本を得るためらしい。

そんな彼が、ある日、長岡から帰ってきて、突然、母親に宣言する。

「おっか様、俺、これから新潟の師範学校に行きますて」

「師範学校？」

突然前触れもなく言われて、ゆきのはめんくらった。

「お前、学校の先生になりたかったん？」

「いんや、別に先生になりてえんではねえです」

「じゃ、どうして？」

いぶかしがる母親に、竜之介は、なぜ自分が師範学校に行きたいか、説明した。明治二十二年に改正された新徴兵令（国民皆兵制）によれば、兵隊検査で甲種合格すると普通は三年以上も兵役に服さなければならないが、師範学校を卒業し官立小学校の教員を勤める者は、六週間現役といって、六週間だけ入営すれば、後は退役して小学校教員に戻れるのだ。

「へえぇ……」

ゆきのは首をかしげた。竜之介の言うことは、あまりに良いことずくめで、信用する気になれない。なんで師範学校出の小学校教員だけ六週間でいいのか？……

実際は、彼らが六週間現役に就くと、軍隊では特別待遇され、歓迎され、「あ、軍隊ってこんなに良い所だったのか」と思わせる。で、職場である小学校に帰ってから、彼らは、子供たちに「軍隊、良いとこ、ホレホレ、お出で」式の話をする。それを聞いた子供たちは、喜んで軍隊に志願するようになる……と、まあ、こういうしかけである。が、この時代、ゆきのや竜之介には、このからくりはわからない。半分だまされたまま、竜之介は、師範学校の入学試験に備えて勉強し始めた。

ゆきのは、少し、ほっとした。体格がよく運動神経抜群の俊男に比べ、次男の竜之介は軟弱で、『青白きインテリ』とでもいうような青年なのだ。本ばかりいろいろ読んでいて、物知りだが、生活力や行動力はあまりない……親の目から見てもそうなのだ。こんな青年が軍隊に入ったら、どうなるか……すぐに死んでしまうのではないか、とゆきのは心配だったのだ。

それに、竜之介は、高橋家の跡取りではないから、何か職業についてほしかった。彼が小学校教員になるのは歓迎である。

三の分家の娘・知穂が、ゆきのの所にやって来た。村の小学校を卒業したばかりの、まだ幼い少女である。

「あの、あたしをここの女中にしてくだせえな」
　などと言う。
「ここの女中？　あんた、何を言ってるん？　女中になりたかったら、自分の家で働けば？」
「お料理とか、お裁縫とか、いろいろ教えてほしいんで」
「それも、自分のおっか様に教われば？」
「ダメ？」
　知穂の目に涙がにじむ。何か思いつめているらしい。
「どうしたんよ、知穂ちゃん、なんでここの家に来たいん？」
　静かに聞くと、知穂は、やっと白状した。
「あたし、あの……竜之介あにさんの……あの……」
「それって……まさか、あんた、竜之介の嫁になりてえってこと？」
　聞くと、少女は、泣きながら、コクンとうなずく。随分しおらしい娘だ。
「へえぇ……竜之介の嫁ねえぇ……なんで、あんた、そんな者になりてえの？　竜之介は、頭はいいかもしれねえけんど、本ばっかり読んで、それ以上の行動力もない、ま、親の目から見ても、よくってせいぜいただの学者みてえな者なんよ。あんた、それ、わかっているの？」
「だって……竜之介あにさんは、あたしの知らねえこと、いっぺい知っているし、話は上手だし……あたし、尊敬してるんで」
「へえ？……尊敬ねえ……」
「あたし、ここの女中になって、一生懸命働きます。ですから……あの、竜之介あにさんんのお嫁に」
「そう。いえ、別にそれがいけないって言うんじゃないのよ。でも、あんたは、それで幸せになれるの？」
「はい」
「へえ……そう……」
　ゆきのは、断る理由はなかったが、なかばめんくらっていた。娘の方からこう言われるとは、思ってもみなかった。三の分家の当主や妻が持ってきた話ではないのだ。知穂って、何という娘だろう？　直接談判に来るなんて。それにしても……。
「で、この話、肝心の竜之介には言ってあるの？」
「いえ、まだで……」
「まだ言ってない？」
「へえ」
「あの、そりゃあね、竜之介があんたと一緒になりてえっていう話なら、あたしは別にそれを断る理由はありませんよ。でも、世の中、変わったもんね、娘の方から相手の親に直談判に来るなんてね、やはり、これも明治の文明開化かしらね」
　ゆきのは、自分の娘時代のことは、都合良く忘れていた。

　知穂は、本家に来て、花嫁修業の女中奉公を始め、竜之介は、新潟市の師範学校に入学する

ため、家から出発していった。
　国はどうなっているのか？……この時代、国の動向を知るには、新聞を読むしかない。ラジオ放送は、まだない。片田舎で、ゆきのは新聞をできるだけ買い求め、読もうとしていた。子供たちのことが心配だった。俊男が日清戦争に出征したときは、心配で死ぬ思いをした。彼が家に帰ってきたときは、ほんとうにうれしかった。竜之介は……ほんとうに彼の計画通り、うまくいくのだろうか？
　新聞によれば、満州（中国東北部）の権益をめぐって、日本はロシアと対立しているようだが……。

（１４）瀬波温泉が始まる

新潟県下は、石油ブームで沸いていた。尼瀬の日本石油の他、東山の宝田石油など、数知れない油田が跋扈し、各地で石油の掘削が行われていた。村上町とその周辺地区でも、油田探しが活発に行われていた。

新潟県の北の果て、村上町。日本海にそった城下町である。明治三十年代、この町の各所や付近で石油採掘が行われていたのである。

出雲崎尼瀬では、高橋俊男と、松田豊太郎とが、相談していた。あとしばらくで、村上町付近瀬波の石油試掘鉱区の期限が切れる。鉱区を手放すのは、惜しい……。この際、思い切ってやってみるか？

一か八か。大きな賭であった。瀬波で石油が出なかったら、投資した財産がすべて失われてしまう。

俊男と豊太郎とは、それぞれの学校時代の友人たちに声をかけ、山田と小林の協力が得られた。周囲の町々の資産家たちからの資金協力も得られた。この時代、新潟県下では、人々が石油に熱心になっていたのだ。事実、越後は石油の宝庫だった。時は日露戦争前夜である。

俊男たちは、正式に、鉱区試掘権の延長を東京鉱山監督署に申請し、認可される。彼らはここで岩船興業組合を設立した。「岩船」というのは、この地方一帯の名称である。

明治三十六年六月、関係者たちを招待し掘削式を行った。すぐに、作業開始。尼瀬油田の技術者たちも雇い入れ、松林の坂の一角で機械を使って地面を掘る。

始めはうまく進んだが……途中で、地盤が堅く、その上地熱が高まり、ロープが蒸されて切れてしまう。何か、妙であった。

冬が来る。日本とロシアの仲はどんどん剣呑になり、戦争が迫ってくる。俊男たちは、自分たちは日清戦争を戦ったので、国への奉公もそれで済み、後はもっと若い者たちに任せよう、というつもりでいた。彼らは石油のことで頭がいっぱいで、戦争のことや日本国のことなどに関心を持っていられなかったのだ。

それにしても、瀬波での石油掘削は難航し、雪の降る寒い冬の間、彼らはなすすべもなかった。

もうダメだ……俊男も、豊太郎も、絶望していた。資金はとうに底をついている。このまま石油が出なかったら、いったい自分たちはどうなるのか……。

明治三十七年（一九〇四年）二月、ついに日露開戦。一方で、俊男たちはあせりにあせっていた。

雪が解けて、春になり、また石油掘削を再開する。

「コーンコーン」と、獣の鳴く声がする。

「何だ？」

人々は不思議がる。

気のついた者が言う「野狐が鳴いているんだ」。

「なぜ？」

天変地異の始まりか？　怖い……。

が、人々はそれに関わっていられず、さらに石油採掘を進めていく。
四月九日午後二時。
ドドーンと大音響。
地下から摂氏九十度の熱湯が噴出した。
「ああっ！」
あまりのことに、人々はただ驚くばかり。
熱湯が高々と噴き上げる。
「ああっ！」
人々はただ茫然としていた。だが、
「あちっ！」熱湯で人間は火傷してしまう。
あわてて近隣の農家の井戸から水をもらい、熱い火傷を冷やす。
「これはいったい何だ？」
俊男にはわからない。
「何でしょうねえ？」
豊太郎にも、わからない。
人々が迷っている間も、熱湯はどんどん噴き出して、坂の上から海岸の松林へ、とうとうと流れ、日本海に注ぐ。
「何だ？」
「何だ！」
人々はざわざわとしゃべりあう。その中で、ついに『温泉』という言葉が出て来る。温泉？これこそ、温泉ではないか？
「やったね、高橋君」
友人の山田が俊男の肩をたたく。
「これは、石油ではなく、温泉だな」
と、小林も言う。
「温泉？……」
俊男はどうしたらいいか、迷っていた。借金に借金を重ねて、ここまできた。ここで石油が出なかったら、皆、枕を並べて討ち死にしなければならぬところだったのだ。そして、ここでは石油は出なかった。
石油ではなく、温泉が出た。
これからどうすればいいのだろう？
「温泉だ！」
「瀬波温泉だ！」
人々は驚き、浮かれて、騒ぎ出す。まもなく近所中に噂が広まり、よそから見物人も大勢詰めかける。裸になって、たらいで入浴する者も出る。弁当持参の見物人も集まる。
俊男たちは、商魂たくましく、バラック建ての浴場を作り、営業を始める。この湯はあまりに熱すぎるので、井戸から水をひいて、うすめた。

彼の脳裏にひらめいたのだ「温泉旅館を作ろう！」。

五月、岩船興業組合は、総会を開き、皆でここに温泉街を作ることにし、瀬波温泉株式会社に改組する。

俊男と豊太郎とは、お湯の噴出口近くに、バラック建てでなく、それぞれの旅館を本格的に作った。噴出口から日本海に注ぐ熱湯の川はせき止めて、お湯は旅館にひいた。

瀬波温泉は有名になり、大勢の湯治客たちがやってくる。繁盛し始めた。

日露戦争も終わり、人々は温泉で遊ぶ余裕も持てたのだった。

（この章は、村上市史　通史編　３　近代
『村上油田と瀬波温泉』に寄る）

（１５）平和は来たが……

一九〇五年（明治三十八年）九月、日露戦争は日本側の勝利で終わった。

戦争が長引かないで良かった、とゆきのは胸をなでおろす。師範学校を出た竜之介は、村上町の小学校に教員として勤めている。六週間現役も、無事、済んだ。そしてゆきのは、知穂を彼の嫁にしてやる。竜之介を尊敬している彼女は、瀬波の旅館の女中となり、一生懸命働いて、彼によく仕えた。

年老いて、今は死に支度でもしようか、と思っているゆきの。彼女の現在の悩みは、孫の大助と蛍子のことだった。

俊男は、松田豊太郎の末妹・千代香と結婚した。そして、首尾良く旅館ができたとき、俊男は大助と蛍子とを貝喰新田から瀬波の自宅に引き取った。だが、この二人と千代香との仲が良くないのだ。

千代香は、まだ幼く、物事がよくわかっていない。俊男に愛されているだけで、有頂天になっている。継子のことまで気配りがない。心がそこまで働かない。いくら待っても、自分の実子はできないらしいので、継子のことをかわいがってほしい、と、ゆきのは思うのだが、それも姑の空振りに終わる。

千代香に言わせれば、彼女は俊男の妻になったばかりではなく、できあがったばかりの旅館の女将にもなったので、それだけでも忙しくてたまらないのだ。

俊男が勝手にゆきのの許から二人の子供を引き取ってきた。それが、千代香にはおもしろくない。もちろん、彼女は、蛍子の出生の秘密については、何も知らないのだが。

「どうしようかねえ……」

と、ゆきのは、長岡にいる娘・柚香を訪ねて、相談する。

「あたしの目の黒いうちに、二人の孫をなんとか幸せにしてやりたいんよ。ま、大助は俊男の長男で、高橋家の跡継ぎだからいいとしても、蛍子が不憫でねえ」

「蛍子は、まもなく、小学校を卒業するんじゃないですか？」

「そのことだけどねえ……」

千代香が、蛍子の女学校進学に猛反対しているのだった。旅館を始めたばかりで、実入りも少なく、また石油掘削のときの借金も重く、家計が苦しいのに、女の子を女学校に入れるなんてムダだ、そんな金はない、と言うのだ。教育熱心なゆきのには、理解のできない考え方だった。

「どうしようかねえ……あたしも年をとってしまい、以前のように家を取り仕切れないで。俊男も瀬波に引っ越したことだし、貝喰新田のこの家も、あたし限りで閉めようとも思っているんだよ」

「そうですか……」

「お前はどうなの？　もうどこかへ嫁に行く気はないのかえ？」

「そんな、今さらそんな」

柚香は、笑った。彼女は今、長岡に新しくできた女学校の教師をしている。押しも押されもせぬ職業婦人、現代風に言えば、キャリアウーマンである。

「あたしのことは、心配しねえで、いいですて。一人でやっていけますから。でも、蛍子のことはねえ……千鳥さが存命中ならともかく、千代香さなんかに任せておく気にはなれませんね」

「どこか華族様のお邸に行儀見習いに出す、というわけにはいかないのかねえ」
「華族様のお邸？」
「ああ、お前も華族女学校を出たんだし、今でも親しくしている華族様って、一人もいないのかねえ？」
「あ、それね」
　すぐに波野川百合子のことが頭に浮かんだ。日清戦争で最初の夫に戦死された彼女も、その後、再婚し、今度はちゃんと男の子に恵まれ、幸せの絶頂にいるはずだった。
「そうね、聞いてみましょう」
　柚香は、百合子に長い手紙を書いた。これまでのこと、姪の蛍子が実は自分の産んだ子であることも述べ、兄の家の複雑な事情を書き、兄が石油掘削に失敗し、なんと予想もしなかったことだが、温泉を掘り当ててしまい、現在は旅館の主人におさまっていることも、書いた。今度、小学校を卒業する蛍子を、子爵夫人として行儀見習いさせてほしい、とも書いた。
　柚香は、百合子は幸せだと信じていた。百合子は華族の奥様として、経済的な悩みもなく、跡継ぎの男子にも恵まれ、幸せなはずだった。
　だが、折り返し届いた百合子の便りは、涙なしでは読めないものだった。

　柚香ちゃん、おたよりありがとう。久方ぶりのお便り、なによりう　　れしかったです。
　貴女がお子さんをお産みになったって、初めて知りました。大変だ　ったでしょうねえ。
　この偏見の多い世の中で。
　貴女のおっしゃる通り、女の身体は子を産むようにできています。でも、言わせてもらえば、どんなに子供がほしくても、できないこともあるんです。
　うちの長男、二歳で急逝してしまいました。
　もともと身体の弱い子でしたが、大切に、大切に、宝物のように育てたのに。
　夕方、熱があって、ぐったりしていたので、遊びすぎたのだろうと思い、明朝病院に連れて行こうと、静かに寝かせておいたのですが。
　深夜に急変してしまい、あわてて病院に連れていったのですが、時すでに遅く、亡くなってしまいました。
　私がいけなかったのです。私がもっと早く病院に連れていっていたら……毎日、後悔して、泣いて暮らしました。

　大切な跡取りを亡くして、両親も私が悪いと言うし、日露の戦役に出征中の夫にも、ただただもうしわけなくて。
　後悔して泣くより他になすすべもなくて。私って、ダメな人間なんです。
　でも、先の主人との間にできた長女は元気だし、日露の戦役も終わって、主人もめでたく帰って来ました。
　と、そこまでは良かったのですが。
　いえ、私は今度の主人が戦死もせず、無事に帰ってきてくれて、それがうれしくて、うれしくて、とっても幸せだったんです。
　でも、私は妻なので、主人の秘密を知ってしまいました。
　秘密……あからさまに言うのも、はばかられることなのですが……主人は負傷して……負傷……それも、足の……股間の……負傷で、もう子をもうけることも不可能になってしまったのです。

私はそれは何とも思いませんでした。もともと、そういうことが好きではなかったし、主人が私を愛してくれるなら、それで良かったのです。もちろん、このことは、両親には言いませんでした。ずっと隠し通すつもりでした。
でも、両親は、早く跡継ぎを、丈夫な男の子を、と、毎日、せっついてきます。主人も、私も、その嵐が通り過ぎるのを、じっと耐えて待つしかありませんでした。そして、そのことを不審に思った両親に、主人の秘密を感づかれてしまったのです。
ある日、私が用があって外出したすきに、両親は、「この役立たず！」と言って、主人を家から追い出してしまったのです。
何も知らずに帰ってきたら、主人は家にいませんでした。実家に帰った、と言われました。
いったい私は子を産むための道具なのでしょうか？　子を成すための男を次々とあてがわれて。
今も、両親は、私に別の男性と結婚しろ、と要求しています。私はそれを断ることもできず、ただ悶々とその日、その日を、暮らしています。
丈夫な男の子を産むために、何度も結婚しなければならない……。
いいえ、私の両親だって、何も好きこのんで私に辛くあたっているんではないのです。それは私にも、わかります。後継者の男子がいなければ、波野川子爵家はどうなるのか。親の気持ちはわかるけれど、やはり、私は、自分も犠牲者だとしか思えません。
戦争さえなければ、良かったのです。日清・日露の二度の戦争で、いったい何人の男たちが戦死したり、負傷したりしたでしょう？　何人の女たちが悲しい思いをしたでしょう？
数え切れないほどの悲劇を生んで、それでも清国やロシアに勝ったから良かったのでしょうか？　私のような女には、難しい理屈はわかりません。でも、戦争さえなければ、私も幸せになれたのだとそればかり思われてならないのです。
今は、今年十一歳になる娘の笑顔だけが生きがいの、私です。
こんな私で良かったら、貴女の大切な姪御さん（娘さん？）のご養育は、引き受けます。
私も、ぐちを聞いてくれる相手がいさえすれば、今よりもうちょっとは明るくなれるでしょうし。

明治三十年代、高崎から長野を経て長岡へ、そしてさらに新潟まで信越線が、開通した。
これで新潟から東京まで、自由に往来できるようになったのだ。
勤務している女学校の冬休み、年末のあわただしいとき、雪の中を、柚香は、瀬波に行った。ここの鉄道はまだ開通していない。雪道を行くのはつらかったが、ここは何としても兄夫婦から娘の蛍子を連れ出さなければならない。
「お前、まさか、自分の秘密を子供にうちあけるんではないだろうね？」
と、兄は不安がったが、柚香は、
「あたしはそんなことはしません。そんなことをしても、何にもならないし、蛍子を自分の子供として大助と分け隔てなく育ててくれた千鳥さにもうしわけが立たねえことです。
ただ、あたしは、娘に教育をつけさせてあげてえんです。女学校がダメなら、華族様の家で、女一通りの教養は身につけさせてやりてえんです」
と、ゆずらなかった。

それにしても、美しく成長した我が娘。東京への旅の途、柚香は蛍子と親しく話をすることができた。

「叔母様」
「蛍ちゃん」
と呼び合える。
至福のひととき。十二年間、これを待っていたように思う。
母は、娘に、岩室温泉で、蛍狩りに行ったときのことを話す。もちろん、そこで産気づいたのは、千鳥にして。
楽しい話はいっぱいあった。
柚香は、今は、三枝義男のことも、許す気持ちになった。ここに、こんな良い娘を誕生させてくれたのだ。この娘こそ、彼が自分に与えた最良の贈り物ではないか。もう彼のことを恨むのはよそう。結婚したら女を養わなければならない男の重荷を理解してあげよう、
と思う。

（１６）幸せを棄てるとき

「まあ、柚香ちゃん！」
　と、百合子は旧友、柚香の手をとって歓迎した。
「おかわりないのねえ、あの頃と」
「えっ、そう？」
「そうよ。まだまだ若い娘みたい」
「まあ、自分だって」
「あら、そう？」
「そうよ、あの頃とちっともおかわりない。苦労なさったのにねえ」
「苦労……」
　百合子の苦労。跡継ぎの男の子を産むための苦労。
　柚香の苦労。娘に、母と名のれぬ苦労。そして、ずっと前に、愛した人に去られた嘆き。
　明治の女たちは、それぞれ、苦労して生きている。そして、その苦労が、彼女たちの表情に深い色合いを重ねている。「艱難汝を玉にす」と言われているように。
「で、どうなさったの？　三人目の旦那様とお会いになったの？」
「それはね」
　百合子は少し言葉を捜していた。
「今度は、もう、軍人さんは嫌だって、両親に言ってあるの。これからまた戦争があるのか、ないのか、それはわからないけれど……。華族には軍人さんが多いの。でも、私はもう、軍人さんは嫌。いつ亡くなるかわからない人を待つのは嫌。軍人じゃない人とお見合いしたいって、両親には言ってあるの。それくらいのわがままは、許してもらおうと思って」
「そう……」
「で、どうなの？　柚香ちゃんは、もう一生結婚しないの？」
「ううん、一生ってわけじゃないんだけれど、大きな家の嫁として苦労するくらいなら、今のまま、独身の女教師として生きていきたいの」
「へえぇ……」
「ただ、女として花を咲かすのはいいわねえ。これから先、一生の間にまた恋愛できたらいいなって、思ってもいるのよ。でも、そうなっても、私は今の仕事はやめたくない」
「それ、まるで下田歌子先生みたいね」
「えっ？」
「行かない？　歌子先生のところ。先生は今、実践女子学園という学校を設立なさって、そこの校長をしてらっしゃるの」
「へえぇ……」
「ね、行きましょうよ、明日にでも。蛍子ちゃんは、うちのさと子と遊んでいればいいんだし」
　さと子というのは、百合子と最初の夫との間にできた女の子である。
　翌日、百合子の強い勧めで、二人は華族女学校の元学監・下田歌子を実践女子学園に訪ねて行った。

そこは、華やかな女性の美を表現しているような、しゃれた洋館だった。校長室もきれいに飾られている。
「先生、お久しぶりでございます」
と、まず、百合子が挨拶する。
「こちらは、高橋柚香さん。覚えていてくださった？　私と一緒に学んだ」
「あ、柚香さんね」
歌子は柚香のことを覚えていてくれた。
「先生、柚香さんは、結婚しないで、女学校の教師をして自活していらっしゃるのよ。偉いでしょ」
「偉いわねぇ。女だって、結婚ばかりが人生じゃないもの。でも、私くらいの年齢になると、考えるのよね、家族がほしいと。私もずっと教師として生きてきたけれど、家庭の幸せはまた、別のものよね。私も、男、女を問わず、人生で一番大切なのは家庭の幸せかもしれないと思うわ。
でも、人にはいろいろな事情があって、天から与えられた使命、というのもあるのよ。その使命と家庭の幸せが両立しなくなったら、そのときは、どうするか、ね」
と、歌子は言う。彼女は五十歳代だが、まだ若々しい。華やぎを失っていない。
そして歌子の言葉を聞いて、柚香には、思い当たることがあった。
「先生、私の好きだった人は、自由民権運動に身をささげて、私を棄てて行きました。その頃は、ずいぶん、恨んだりしたんですけれど……でも、そういう男性だったからこそ、私は恋したのかもしれません」
「そうねえ、それでなくても、男の人は重荷を背負って生きているのかもしれないわね」
「そうですね……」
柚香は考える。自分自身はどうだろう？　今は自分の天職と考えている女学校の教師という仕事と……将来家庭ができたらの話だが……その家庭の幸せとが拮抗するものになったら、自分はいったいどうしたらいいのだろう？　幸せを自ら棄てなければならないとき、人はどう考え、どう行動したらいいのだろう？　誰か教えてほしい。

結び

筆者の母は、この蛍子の娘である。彼女は、自分が原田甲斐の末裔であることを誇りにして生きていた。ついで、瀬波温泉の開場者・高橋俊男の孫であることにも。
ところが、その母が亡くなり、わずかばかりの財産を遺したので、相続のため、母の古い戸籍が必要になり、新潟県南蒲原郡福島村貝喰新田という所の戸籍を取り寄せ、驚いた。
なんと母の母親つまり私たちの祖母・蛍子は、俊男の実子ではなく、姪だったのだ。俊男の妹・柚香は、未婚のまま祖母を産んだのだった。
この発見について、母と話しあいたい……と思ったが、これはダメである。母はもう鬼籍の人になっている。
瀬波温泉は、大正期に鉄道・羽越線が通ったこともあり、繁盛した。そして大助が若くして亡

くなったため、蛍子が旅館の女将になった。いま、ここは、蛍子の孫娘、筆者のいとこが継いでいる。
筆者は、過去の人たちのさまざまな思いを記録に残そうと思い、この物語を書くことにした。
もちろん、これは、大部分、筆者の勝手なフィクションなので、物語の人物設定その他、すべて、責任は筆者にあることをここに記しておく。

了

樅の木の子孫たち　第三部　明治の世

http://p.booklog.jp/book/56945

著者：小城ゆり子
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/youko103/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/56945

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/56945

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ